小説 クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ六人の魔法少女

やきにく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小説　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ六人の魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ６０７６Ｙ

【作者名】
やきにく

【あらすじ】
Ｐｉｘｉｖでも公開しているクレヨンしんちゃんと魔法少女まどか☆マギカの異色のクロスオーバー小説。

【あらすじ】
それは、一つの家族と彼女達の運命を変えてしまうような出会い――
それは、知られざる魔法少女の物語の始まり――

埼玉県、春日部では、一ヶ月前から謎の自殺や殺人事件が多発して

いた。
その頃永遠の五歳児野原しんのすけは、二人の少女が荒廃した春日部を舞台に巨大な怪物と戦い、そして白い生き物から「君の妹に、僕と契約して魔法少女になってほしいんだ！」と頼まれる夢を見た。

目が覚めたしんのすけは、カスカベ防衛隊内で行われている都市伝説大会にて、「最近、春日部で自殺者や殺人事件が多発しているのは怪物のせい。」という噂を耳にする。

そしてその日の夕暮れ、カスカベ防衛隊と別れたしんのすけは不思議な声に導かれ、謎の白い生き物が自宅の庭で傷ついているのを見つけて拾った。
謎の生き物をしんのすけは拾ったことによって魔法少女と魔女と呼ばれる存在と出逢い、やがてその存在によって野原一家、そして春日部を巻き込む大騒動に巻き込まれてしまうのだった――。

1．夢の中で出逢った、ようなだゾ（前書き）

【注意！】

・世界観はクレヨンしんちゃんがメインで、その中にまどか☆マギカのキャラクターがいる形になります。

・クレヨンしんちゃんを中心に描くので、もしかしたらまどか☆マギカのダークな雰囲気が台無しになる恐れがあります。ご了承ください。

1．夢の中で出逢った、ようなだゾ

序章

その少女は、人通りの少ない住宅地を駆け回っていた。落ち着きのない様な容姿にはおよそ似つかわしくない大型の銃を持ち、左手には円盤状の盾を装備している。更に、左手の甲には、紫色の宝石が埋め込まれている。

「（まいったわね…）」

駆けていた足を止めて、小さく呼吸しながら辺りを見渡す。

「（こんな場所で、あいつを見失うなんて――）」

銃を消して、ぐっと拳を握る。

「（一旦引き返してまどかのあたりを見張るしかないのかしら…？）」

最後に見た、あの忌まわしいバケモノが告げた言葉を思い出す。

「――新しい、素質を持った少女…。一体何者かしら…」

ふと、言葉を溢しながら、目を伏せて思考する。

「（いえ、ここで考えてもしょうがないわ。もう一度、帰って体勢を立て直すべきね）」

少女は、髪を掻きあげ、はあ、と溜め息をつくと、なにかを睨み付けるように道の暗がりを見据え、踵を返した。

「ここ……どこ？」

辺り一面、白と黒のチェック模様の空間。その中心に、赤いトレーナーに黄色の短パンを穿いた幼い少年が、辺りをウロウロする。少年の名は野原しんのすけ。しんのすけは先刻まで自宅にいたのに、気がつくとこの不思議な空間に立っていたのだ。

「父ちゃん？母ちゃん？」

大きめの声で、しんのすけは空間に向かって父と母に呼び掛ける。しかし、返事は帰ってくる気配はない。

「んもー父ちゃんも母ちゃんも迷子になっちゃったのかな？仕方ないなあ」

しんのすけは、チェック模様の空間を歩き始めた。
しばらく歩き続けていると、開かれた場所へと出た。左右と正面に階段があり、正面の階段の先には緑のランプとその下に扉がある。
あれは非常口だ。
迷わずにしんのすけは正面の階段を駆けあがり、非常口のドアを開ける。

そこには、しんのすけの想像を絶する光景が眼下に広がっていた。
真っ赤な空に、崩れた建物。一言でいうなら、地獄のような世界が広がっていた。
建物の中には、しんのすけがよく知る建物も混じっていた。
よく母のみさえと妹のひまわりと一緒に買い物にいくサトーココノカドー。しんのすけが通うふたば幼稚園。そして、自分の家。
だが、無垢かオバカというべきか、しんのすけはそれに気付かず「ほぉ～ぉ」と目の前の光景にちょっぴり驚く程度だった。自分が置かれている状況を全く理解できていないようだ。
興味本意で街に降りてみたいところだが、降りれそうな場所がない。

「なんだ、あれ？」

そこでしんのすけは気付いた。街の上空に、巨大な『何か』が浮かんでいることに。そして、それに立ち向かわんとする二人の少女が。
『何か』が、巨大な炎を少女たちに向けて吹き出してくる。それを黒いロングヘアーの美少女が左腕の盾でそれを防ぐ。
そして、黒髪の少女はどこから取り出したのか、バズーカ砲を構えて、弾を発射する。続いて、桃色のツインテールの少女が、弓を構えて次々と矢を放つ。
しかし、それらの攻撃は、『何か』にぶつかる直前、『何か』に吸い込まれるように攻撃は無力化させる。
かわりに、『何か』はビルの残骸を浮かばせて、それを少女に向けて飛ばす。

「！」

ぶつかる直前、黒髪の少女が動いて、桃色の髪の少女に触れる。すると二人の少女は一斉に姿を消して、ビルの残骸を回避する。

「おおーっ！スゴいゾ！カメラはどこだ？」

キョロキョロとしんのすけは目の前の光景を特撮の撮影と勘違いしているのか、カメラを探す。

「これはテレビの世界じゃないよ。残念だけれど、これは現実の出来事なんだ」

「お？」

すぐそばで、誰かがしんのすけに話しかける。しんのすけは声のした足下を見ると、長い耳とビー玉のような赤い目が特徴の猫か犬のような四つ足の白い獣がちょこんと座っていた。

「おわっ！シロがしゃべってる！」

白い獣をしんのすけが飼っている仔犬のシロと勘違いしているしんのすけは飛び上がって驚いた。

「違うよ。僕はシロって名前じゃない。それより、君は目の前の光景になんとも思わないのかい？」

しんのすけはしゃがんだ体勢のまま、再び正面を向く。

『何か』の攻撃を受けた少女たちはなされるがままに吹っ飛ばされ、崩れた建物にぶつかる。

「そうだ！オラがお助けしなくちゃ！」

現実に戻ったしんのすけはその場をぐるぐると回ってコサックダンスを始める。

「落ち着いて。まだ希望は潰えたわけじゃない。僕は君に頼みたいことがあるんだ」
「頼みたいこと？」
ピタリとコサックダンスを止めて、期待を込めた視線を白い獣に送る。――まかさ・・・。
「君の妹、野原ひまわりに魔法少女になってほしいって伝えてもらいたいんだ！君の妹は、あの少女だけじゃない、世界を救うチカラを秘めているんだ！」
それを聞いたしんのすけは、ガラリと表情を変えた。口をへの字に曲げたその表情は、今にも「えーっ」とでも言いそうな表だった。
「えーっ…なんでオラじゃなくてひまなの？てっきりオラがアクション仮面に変身してお助けするのかと思ったぞ」
「え、だって君は男の子じゃないか。それに、幼いひまわりに僕が直接頼むより、お兄ちゃんの君が頼んで伝えたほうが、ものわかりがよさそうでしょ？」
「ひまはまだ赤ちゃんだゾ。それにオラ、ちょっと眠くなっちゃったゾ」
フワァ～と、強烈な眠気に襲われたしんのすけは目の前の光景に構わず伸びをしてあくびをその場に寝転がってしまった。白い獣は、しんのすけの予想外の行動に驚いてしんのすけの顔の傍に近寄って呼び掛けた。
「ちょ、ちょっと！ここで寝るの？！目の前のことは放っておくの？！せめて僕の話を聞いて！おーい！！」

白い獣の呼び掛けに応じることは出来ずに、しんのすけの目の前にするりと闇が舞い降りてきて、白い獣の呼び掛けが遠くなっていくにつれて、しんのすけの意識も遠くなっていった。

1．夢の中で出逢った、ようなだゾ

「――っていう夢を見たんだ」

しんのすけは話し終えて、周りにいるカスカベ防衛隊のみんなと同じようにしゃがむ。

そんなしんのすけを、外見からしてしんのすけと同年代と思われるちょっと逆立った藍色の髪の子どもがいぶかしげに見る。

「しんのすけ、話聞いていたか？都市伝説を話すのに、どうして夢の話をするんだよ」

しんのすけ曰く、「ホクロの数を知り尽くしているほどの大親友」、

風間トオルが口を尖らせてしんのすけに言う。
ここは、春日部にある牛の尻公園、しんのすけたちカスカベ防衛隊はここの中心に穴の空いたドームの遊具の中で、今日は都市伝説大会をカスカベ防衛隊内で催しており、おのおの用意した都市伝説を話して、その中で興味深そうなものは調査をしてみよう。というものだ。

「あれ？昨日みた夢の話だとこってり思っていたゾ」
「でも、おもしろそうな夢だね！」

しんのすけの隣に座っている、丸刈りで丸い顔の少年、佐藤マサオがしんのすけの話に興味を抱いたようである。

「だけど、どうしてしんちゃんの夢に出てきて、ひまちゃんに魔法少女になってほしいって頼んだのかしら？」

目の前に魔法少女候補が一人いるのに、としんのすけの正面にいるカスカベ防衛隊の紅一点、桜田ネネが不満そうに言う。しらけた視線が一斉にネネちゃんに降り注ぐが、ネネちゃんはどこふく風で気づいていない。
ここでネネちゃんに気づかれて不快にさせるのは色んな意味でまずいなので、コホンと風間くんはわざと軽い咳をすると、

「そ、それじゃあ最後にボーちゃん。締めを頼んだぞ」

「ボォ～」と答えたのは、風間くんのとなりにいる、鼻水を垂らしたボーっとした少年、ボーちゃんはすっくと立ち上がって、都市伝説をぽつりぽつりと語り始めた。

「これは、今、春日部でよく起きてる自殺や殺人事件にまつわるお

話」

不気味な雰囲気がボーちゃんを中心に、ドームの内側を支配していく。

これは、今、春日部でよく起きてる自殺や殺人事件にまつわるお話。

ここ一ヶ月間、この春日部において原因不明の殺人事件や自殺が相次いで起こっている。殺人や自殺の動機はどれも不明で、警察も頭を悩ませ、しんのすけの通うふたば幼稚園も現在それが原因で休園になっている。

そして、最近インターネット上で春日部に関わる謎の都市伝説が語られているという。

この春日部に、今、なんらかの影響で異世界の扉が開かれている。

とボーちゃんは言った。

その扉から、怒りや絶望を抱いた謎の怪物が春日部に現れているという。

そして春日部の人々を催眠術で心をコントロールし、人々を殺めた後その魂を食らって、腹を見たそうとしている。しかし、空腹は満たされずに、怪物は次の獲物を探しもとめて春日部をさ迷っているという――。

それは、今も起きているお話。その怪物は、今日も空腹を満たすために一人ずつ、自殺に追いこんでいく――。

「わあっ！」

「ぎゃあああああ！！」

ボーちゃんが話を終えて、恐怖と静寂が辺りを包んだかと思うと、しんのすけが大声を出して、ドームに風間くん、ネネちゃん、マサオくんの悲鳴が響く。

「な、なにやってんだよしんのすけ！」
「もう、驚かせないでよ～」
「ちょっと漏れちゃった…」

口から心臓が飛び出るほど、あるいは少し漏らしてしまった風間くんたちはハアハアとあえぎながらしんのすけに非難の声を浴びせる。しかし、しんのすけはその光景が面白かったのかアハアハ笑っている。
一方、語り手のボーちゃんはまったく動じておらず、ぶれない。これはカスカベ防衛隊で一番謎に包まれた彼のスゴいところのほんの一部である。

「これでボクの話は終わり…」

そう言って、ボーちゃんはしゃがんだ。風間くんは気を取り直して立ち上がった。風間くんにならってしんのすけたちも立ち上がる。

「ふぅ～…これでみんな話したね。みんな、どれが一番調査しようと思った？」
「やっぱりボーちゃんの話かなぁ」
「でも、ちょっと怖くない？」

一通りしんのすけを除く全員が話し終えて、明日、どれを調査しようか話し合う。
そして、多数決で決めることになって、最終的にボーちゃんの都市伝説の「謎の怪物」を調査することになった。

「それじゃあ明日、一時にここ集合ね！」
公園の入り口で、風間くんが横に並んでいるしんのすけたちに呼び掛ける。
そしてカスカベ防衛隊はここで解散し、それぞれ帰路につく。
「おおっ！オラも早く帰らないとアクション仮面が始まっちゃう！」
しんのすけも大好きな特撮番組、アクション仮面が始まるため、寄り道せずに足早に自宅へと向かう。
商店街、そして住宅地をアクション仮面の主題歌を口ずさみながら歩き回り、家まであともう少しというところで、それは起きた。
「ア～クション仮面、正義のか～めん～ゴゴッゴ～レッツ――」
（――けて…すけ…て）
「お？」
突然、しんのすけの頭の中に直接何者かの声が響いた。幼い、女の子にも男にも聞こえる不思議な声だ。
（たす…けて…）
「て…て…てまきずし？」
（し…しずかちゃんの入浴シーン！…ってしりとりしている場合じゃないんだけれど…しかも負けちゃったし……）
不思議な声は今にも消え入りそうな声でノリツッコミをしてくる。
本当に助けを求める程大変なのだろうか。
しんのすけは辺りを見渡してみるが、路地にはしんのすけ以外いない、誰も。声のする方向も、検討がつかない。

（そ…そこには…いない…よ…こ…っち…こっちだよ…しん…ちゃん…き…君の家の…近くだ）

「オラの家？わかった！ちょっと待ってて」

ちょっとは危機感を持ってくれたのか、しんのすけは自宅の方向にむかってダッと走り出した。――何故、この聞き慣れぬ謎の声が自分の名前と家の場所を知っているのかも忘れて。そのかわり、一体誰なんだろ、と走りながらしんのすけはふっと考えた。

（きれいなおねいさんだったらいいなぁ～）

そう考えると、どんどん超ポジティブ思考のしんのすけの頭の中で妄想が広がっていく。

『しん……ちゃん……助けて…！』

しんのすけの頭の中で、約高校生ぐらいの少女が血まみれで倒れている。そこへやけに顔立ちが整ったしんのすけが颯爽と現れて、手を差し伸べる。

『大丈夫、いま、僕が君の事をお助けするから……！』

『しんちゃん…ありがとう、大好き！』

そう言って、少女はしんのすけを抱きしめ、顔を近づけほっぺにキスをする。

「いやーん！おねいさんだいたーん！」

しんのすけの頭の中が妄想と現実の区別が付かないレベルまで到達

し、自分の体を抱きしめてくねくねと体を動かす。

（あの…はやく…きて…）

妄想を振り切ったしんのすけは、なんとか自宅の玄関の前に到着すると、再び不思議な声が、今度はしんのすけの左耳から聞こえてきた。

（こ…っち…こっちだよ…庭のほう…）

しんのすけは言われたとおりに左に曲がって庭へと入っていく。同時に、ぷんと鉄を連想させるような臭いがしんのすけを襲う。

「！」

うわっ！と、しんのすけは目の前の光景に目を見開いた。調度、垣根のすぐ近くに、白い体が自分の血で赤く染まった耳が長い謎の子犬くらいの大きさの四本足の生き物が、目を閉じてぐったりとした様子で倒れていた。すぐそばには、飼い犬のシロが、ペロペロと心配そうに生き物の傷をなめている。シロがやったわけではなさそうだ。

「大丈夫？」

恐る恐るしんのすけは白い生き物に近づくと、ぴくりわずかに動いた。まだ生きているようだ。

「待ってて！今助けるゾ！」

しんのすけはシロの小屋からいつも親が留守の時、しんのすけが一人で帰ってきてもいいように隠している非常用の鍵を取り出して、玄関へ駆け出すとドアを開けた。
そして生き物を抱きかかえて家の中につれていくと、リビングに置いて、以前みさえがひざを擦りむけたしんのすけにしように、救急箱からガーゼ、包帯、消毒液を取り出して治療する。決して手際いいとは言えないが、なんとか包帯を胴体に巻いて応急措置は済ませられた。
生き物は未だに起きる気配はないが、胸が上下に動いているのでまだ死んではいない。
シロも窓越しに生き物を不安そうに見つめている。
しんのすけはあぐらをかきながら生き物を抱きかかえ、テレビをつけて、アクション仮面を見始めた。運よくオープニングが始まったところだ。
しかし、しんのすけはアクション仮面よりも、傷付いた謎の生き物に意識を集中させていた。
時折優しく撫でてやり、大丈夫かな、と生き物の身を案じる。
アクション仮面が終わり、ニュース番組が放送される。

突然、ガチャリと玄関からドアが開かれる音が聞こえた。

「ただいまー！しんのすけ？いるの？」
「！」

ギクリとしんのすけは、その声を聞いて身体を硬直させた。
隣のおばさんのところに行った母のみさえと妹のひまわりが帰ってきたのだ。
しんのすけはすぐに立ち上がって、いつも家族で寝ている部屋へと生き物を連れて走り出した。
ただでさえシロを飼う事を許されることに色々手間がかかったのに、

もしこの生き物をみさえが見たら「捨てなさい！」と言われるのがしんのすけには容易に想像できた。

「しんのすけ、いるの――　あら？なんで救急箱があるのかしら？」
「たあ？」

リビングに入ってきたみさえが、救急箱と散らかっているガーゼや消毒液を見て、首をかしげる。
ひまわりも同じように首をかしげる。
そしてみさえは寝室へ向かうと、しんのすけが直立不動の状態で立っていた。

「どうしたの？しんのすけ」
「い、いやなんでもないゾ！ほんとになんでもないゾ！」
「……」

はっはーん、とみさえは怪しんでしんのすけを睨む。

（あの顔、なにか隠しているに違いないわね）

どこか慌てているしんのすけの顔に「なにかを隠しています」と書かれている。
ためしにみさえは目だけを動かして、部屋中を見渡す。すると、窓の近くに掛けられているカーテンに妙なふくらみがあることに気付いた。
そのカーテンに向かって歩くと、しんのすけが血相を抱えてみさえの前に立ち塞がった。

「な、なにもないってば！」

しかし、みさえは無視してカーテンのもとまでくると、バッ、とカーテンを一気にめくった。同時にしんのすけは全てを諦めたような表情をした。

「あら、なにもないじゃない」

「え？」

しんのすけは顔をあげてみさえのそばに来て、カーテンの内側を覗いた。そこには、あの生き物が安静に寝ているが、みさえの視界にはなにも映ってなかった。

「母ちゃん、見えないの？」

「なにが？」

「あれ」

と、白い生き物を指差すが、いいえ、とみさえは首を横に振った。

「気味悪いこと言わないでよ。あ、それより隣のおばさんからカルピスもらったから一緒に飲みましょ」

「ほ……ほい」

みさえはもう怪しむ様子もなく寝室から出ていき、キッチンでしんのすけと自分のぶんのカルピスを作り始める。

しんのすけは、その一連の行動を呆然と見ているしかなかなった。

もう一度、あの白い生き物をみやると、始めて見つけたらときと違い、穏やかな表情でスヤスヤと寝息を立てていた。

その夜、パジャマに着替えて、しんのすけはじっと未だ目覚めぬ白い生き物を見つめていた。

先程、父のひろしが帰宅した際に、今度は堂々と白い生き物を見せ

るが、やはりみさえと同じように「なにもない」と言うだけだった。

「オラにしか見えないのかな」

うーん、とうなって考えていると、背後から「たい」　という声と供に、しんのすけのパジャマを誰かが引っ張った。

ふりむくと、オレンジがかかった茶色のカールヘアーの前髪が特徴のまだハイハイしている可愛らしい0歳児、野原ひまわりがしんのすけのパジャマを引っ張って存在をアピールしていた。

「おお、ひま。どうしたんだ?」

「あー」

ひまわりは右腕をあげて、白い生き物を指差した。それを見て「おお!」としんのすけは声を上げた。

「ひまも見えるの?!」

「たい!」

しんのすけの言葉に、ひまわりは頷く。ひまわりは赤ん坊であるが、今のようにしんのすけの言葉を理解できたり、宝石類をニセモノか本物か見分けられる目利きを持つなど、一般的な赤ん坊のスペックを越えた部分を持っているのだ。

ひまわりは白い生き物に近づくと、よしよしと頭を撫でた。間違いなくひまわりには見えており、白い生き物に触れられる。

「やっと仲間を見つけたゾ。オラだけしか見えていなかったらどうしようと思ったゾ」

「ほーほー」

ひまわりが白い生き物の肩を掴んでギュッと抱き締めようとするが、せっかく塞いだ傷がまた開いてはならないのでしんのすけがひまわりを離した。ひまわりはぶーっと頬を膨らませて不機嫌になる。どうやらひまわりはこの白い生き物を気に入ったようだ。
ふと、しんのすけはこの白い生き物にどこか、デジャヴを感じた。
そうだ！今日見た夢の中で出て来たあのヘンな生き物と似ているんだ！
しんのすけの頭の中で認識の光が灯ったところで、みさえが寝室にやってきた。

「しんのすけ、もう寝る時間よ。ひまも寝ましょうね」
「ほーい」

しんのすけは白い生き物を自分の布団のそばに置いて、布団に潜り込んだ。ひまわりはまだ白い生き物を触りたいのか、みさえの腕の中で抵抗し、突然抵抗するひまわりにみさえは戸惑いながらしんのすけの隣の布団にひまわりを寝かせた。その光景を見守ると、しんのすけはそっと目を閉じた。

翌日――。

（……ちゃん……しん……ゃん！）
（ん……？）

誰かがオラを呼んでる…？
起きなきゃ、としんのすけは重い瞳を上げると、目の前にぼんやりと白いなにかの塊がしんのすけの上に乗って、自分の顔を覗いていた。

「おはよう！しんちゃん！」

「んっ……だれ？」

聞き覚えのある、頭に直接語りかけてくる声。目をゴシゴシさせて上半身を起こすと、目の前に元気な様子のあの白い生き物が座っていた。それを見て、しんのすけは一瞬で覚醒した。

「おおっ！びっくりしたゾ！」

「ちょっと驚かせちゃったかい？」

ぴょんと白い生き物は布団の上から跳んで、しんのすけのすぐそばへ着地して座る。しんのすけも、白い生き物に合わせるように正座してお互いに顔を合わせる。

「もう大丈夫なの？」

「うん！君が治してくれたお陰で、すっかり元気になったよ！君は僕の命の恩人だよ！」

僕の名前はキュゥべえ、と白い生き物は自己紹介をした。しんのすけも、自己紹介をする。

「オラ、野原しんのすけ5歳！好きな正座はおうし座だゾ」

「君の事は知っているよ、しんちゃん」

「おお！オラも有名になったんだなあ。照れるなあ～」

エへ～としんのすけは独特の笑みを浮かべる。ちょっと違うんだけどなぁ、とキュゥべえは苦笑を浮かべる。

「でも、なんでキュウリ君はオラのことを知っているの？」

「キュゥべえだよ」

しんのすけの間違いを訂正しながら、キュゥべえは言葉を続ける。

「僕はもともと、君と、君の妹の野原ひまわりに頼みがあって来たんだ」
「オラとひまにたのみって？」
「うん、それは――」
「しんのすけ、起きてるの？誰と話してるの？」

エプロン姿のみさえがキッチンから寝室へ入ってきた。キュウべえの言葉がみさえの言葉と重なって、キュゥべえが何を言っているのか聞き取れなかった。

「オラ、誰とも話していないゾ」

キュゥべえがひまわり以外見えないことはわかっている。しんのすけはみさえに平然とした態度で嘘をつく。

「そう？それより、幼稚園が休みと言ってももう１０時よ。もっと早く起きなさい」
「ほーい」

しんのすけは立ち上がると、キュゥべえを連れて朝ごはんが用意されているリビングへと向かった。
テーブルには納豆（ネギいり）とごはん、そして昨日の残り物の肉じゃがが置いてある。

「キュウリ君もたべる？」
「だからキュゥべえだってば！」

二度目の間違いに声色を強くして突っ込みながらも、キュゥべえはしんのすけが用意してくれた肉じゃがを食べ始める。

しんのすけもキュゥべえが食べ始めたのを見て、自分も納豆をかき混ぜてごはんにかけてスプーンで食べる。

「ところで、なんでキュウリ君はオラとひまにしか見えないの？」

「……それは僕が、今は君とひまわりちゃんしか見えないようにしているからだよ」

訂正することを諦めたキュゥべえは、一度、まだひまわりが寝ている寝室の方を見て言う。

「どうして？」

「だって……見せたら、ほら、わかるだろ？」

キュゥべえを見たみさえが、反対して捨てて来なさい、というのが簡単に想像できる。ウンウンとしんのすけは頷いて

「そうだねえ、確かにウチの母ちゃん、妖怪ケチケチババアだから」

「だろう？」

キュゥべえはウインクして、じゃがいもにパクついた。同時に、しんのすけは背中に、なにか威圧感が襲っていることに気付いた。おそるおそるしんのすけは振り向くと、鬼のような表情を浮かべたみさえが立っていた。

「しんのすけ…だれが妖怪ケチケチババアですって…？」

「い、いやあ母ちゃんのことじゃないゾ！なぁキュウリ君！」

「……」

キュゥべえはなにも答えなかった。そもそも、みさえの視界にはなにも映ってないのだからキュゥべえが弁解するだけ無駄なのだが。

その後、みさえからグリグリ攻撃を受けたしんのすけはこめかみあたりを抑えながらキュゥべえとひまわりのいる寝室へと戻っていった。

「しんちゃん、君も大変だね……」

「母ちゃんお便秘ちゅうだからなあ……うっちゃりしちゃったゾ」

みさえは便秘を患っているのである。便秘中は、もともとの短気な性格に加え、殺気立つほど狂暴になることがある。軽はずみにみさえの悪口を言おうものなら、いつもの二倍の威力の制裁が待っている。便秘が治るまでのあいだは、しんのすけもひろしも穴に隠れるウサギのごとく穏便に過ごすことにしている。

さて、とキュゥべえはしんのすけと向き合い、話を切り出した。

「しんちゃん。ここから先はちょっと大事な話だから真剣に聞いてくれないかな？あ、まずはひまわりちゃんを起こしてきてくれないかな？」

「おっけー」

しんのすけは寝ているひまわりを起こすと、ひまわりはキュゥべえを見て喜びを露にしながら近寄る。しんのすけはひまわりを抱っこして膝の上に乗せた。

「連れてきたよ」

「やっ！」

ひまわりがキュゥべえに挨拶するように右手を上げる。キュゥべえはにっこりと笑みを浮かべて、ひまわりに近づいて言った。

「やあ、始めましてひまわりちゃん。今日、僕は君に面白いことを教えるために来たんだよ」

「たい？」

「面白いことってなに？だって」

しんのすけがひまわりの言葉を取り次ぐ（若干しんのすけ自身の興味も兼ねているが）。しんのすけは原理が不明だが、ひまわりやシロの言葉や感情が読み取れるのだ。

「それは――」

そこでキュゥべえは言葉を切って、息を大きく吸い込んだ。そぶりからして次に出てくる言葉が、重要なようだ。ごくりとしんのすけとひまわりは息を飲んだ。

「野原ひまわり、僕と契約して魔法少女になってほしいんだ！」

「たぁ？」

「魔法少女って？」

今度はしんのすけがひまわりの言葉を取り付かず（ほぼ同じ意味だが）に尋ねた。それをひまわりの言葉と勘違いしたキュゥべえは、説明を始めた。

「そのまんまの意味だよ。ほら、テレビのアニメとかであるでしょ？魔法少女もののアニメ」

「うん」

しんのすけも、魔法少女もののアニメ「ま・ほーしょうじょ　もえP」を見ている。それに、みさえが自分の昔話で魔法少女に憧れていたと聞いたことがあるため、しんのすけは理解するのに時間は掛からなかった。

「ひまも、ああいう風になるの？」

「そうだよ。それに、もちろん見返りはあるよ。もしひまわりちゃんが魔法少女になるなら、ひまわりちゃんの願いを一つ叶えてあげるよ！」

「キャイ？！」

「ほんと？！いいなあひま」

ひまわりも案の定キュゥべえの話を理解しているようで、願いを一つ叶えると聞いて目を輝かせる。

「ねぇキュウリ君、オラも魔法少女になれないの？」

しんのすけもキュゥべえと契約したいらしい。もちろん、見返り目当てで。

「うーん……してあげたいところだけど、しんちゃんは男の子だしね。これは決まりなんだ」

わざわざしんのすけにこうやって姿を見せているのも、ひまわりと意志疎通が出来るからだよ、とキュゥべえは付け加えた。

「えーっ…オケチ！ひまのつーやくしてあげないゾ」

「それ困るなぁ」

どうしてひまだけ、と、魔法少女になる資格がないしんのすけは頬

を不機嫌そうに膨らませた。
そこへみさえが寝室へ入ってきて、しんのすけは一瞬ぎょっとした。
「なんか楽しげな話してるけど、さっきから誰と話しているの？」
「ひ、ひまとだゾ！」
「ふーん……」
訝しげにしんのすけを見るみさえ、しんのすけはキュゥべえの存在がバレるわけでもないのにさっきと違い、背中から汗が吹き出る。
「まあいいわ。それより、そろそろひまにミルクを与える時間だからひまを渡して」
「ほ、ほい」
しんのすけは立ち上がって、みさえにひまわりを渡した。ひまわりは、みさえに抱きかかえられながら、「たーい！」と抵抗するように声を出しながら両手をキュゥべえに伸ばした。
「はいはいひまちゃん、いまあげまちゅからね～。そういえば、しんのすけ。今日は風間くんたちと遊ぶ予定でしょ。早く行かなくていいの？」
「おお、こってり忘れてたぞ」
昨日、帰る前に風間君が午後一時に牛の尻公園に集合するというのはしんのすけの記憶に真新しい。
「友達との約束かい？」
みさえが完全に去ったところで、キュゥべえが言った。

「うん、オラもちょっと出かけなくっちゃ」
「契約の話なら、別に帰ってきてからでも僕はかまわないよ。気をつけて行ってらっしゃい」
「キュウリ君も一緒に行く？」
「僕はやめとくよ。こんな状態だし、それにいま僕は狙われているからね…」

キュゥべえは包帯が巻いてある腹を軽くさすった。

「狙われているって、誰に？」
「君が気にすることは無いよ。さあ、遊びに行っておいで」
「ほほーい、じゃ、行ってくるね」

しんのすけは特に気にも留めずに、駆け出して家を出ていった。
その一連の様子を、ひまわりにミルクを飲ませながらみさえがじっと眺め、一人考える。

――一体、どうしたのかしら。
昨日から、しんのすけの様子がおかしい。さっきみたいに誰もいない部屋で独り言をしゃべっていたり、何もいないのに何か隠しているようなそぶりを見せたり。
今度問いだしてみると同時に、ふっとみさえは不安を感じた。――また、『あの時』のように、とんでもないことが起きるのかもしれない、と。

外に出たしんのすけは真っ直ぐ、牛の尻公園へと寄り道せずに向かっていた。商店街を抜け、別の住宅街へ入っていく。
人気（ひとけ）のない住宅街を歩いていると、後ろから誰かがしんのすけの名前を呼んだ。

足を止めて振り向くと、そこには風間くん以下カスカベ防衛隊のみんなが横に並んで口元を緩めながら立っていた。しんのすけも笑みを浮かべる。

「おおっ！みんな先に来たのかー。それじゃさっそく――」

「なあ、しんのすけ。これからみんなで、面白いトコロへ行こうと思うんだ」

しんのすけの言葉を遮って、風間君がやけに低い声で話す。

「しんちゃんも一緒に行きましょ」

ネネちゃんも続いて話す。

「え？でも……」

すると後ろから気配も無くマサオ君とボーちゃんがしんのすけの両手をそれぞれ掴んで半ば拘束する。

「いいからいいから」

「……いこ」

そう言ってしんのすけの手を引っ張って、先頭を行く風間君とネネちゃんに連れて行かれた。

しんのすけは妙な違和感を持ちながらも、なされるがままに風間君たちについて行くしかなかった。

見慣れない道を進んで約１０分後、目の前に大きな倉庫のような建物が見えた。風間君たちはまっすぐそこへ向かっていく。

ふと周りを見ると、他にも数人の大人が倉庫に向かっていく。一体

この中で何が行われようというのだろうか。

「ねぇ、風間君――」

しかし、風間君はなにも答えない。しんのすけは視線を風間君から逸らそうとしたその時、風間君の首筋に不思議な刻印が浮かんでいることに気付いた。

風間君だけじゃない、ネネちゃんも、マサオ君もボーちゃんも周りの人たちも、みんな同じ刻印が浮かんでいる。

やがてしんのすけたちが倉庫の中に入ると、後ろでガラガラと扉が自動で下りてきて出入り口を遮断した。同時に、しんのすけも解放される。

すると、一人の女性が七輪を持ってきて、それを床に置いた。続いて男性が練炭を持ってきて、それを七輪の中に入れる。

その光景を見て、しんのすけは、いつだったか、どこか家族でキャンプに出かけたときに聞いたひろしの言葉を思い出した。

――しんのすけ、七輪の扱い方には注意しろよ。ちゃあんと、換気の効いたところでやらないと、イッサンカタンソチュウドクになって、みんな死んじゃうからな。

「だめだゾ！」

叫んでしんのすけが走り出すが、目の前に風間君が立ち塞がって、しんのすけを止める。

「なにやってんだしんのすけ、あれは神聖な儀式なんだぞ」

「あれって危ないんだゾ！イッカンサタンソチュドウクになって死んじゃうゾ！！」

「いいのよ、しんちゃん。それで」

ネネちゃんが近寄ってきて、耳元で囁く。
「僕たちはこれから幸せな世界へ旅に出るんだよ。それがどれだけすごいことだか分からないの？しんちゃん」
マサオ君が「フフフッ」と、いつもの彼とは想像できない不気味な笑い声を浮かべる。
「生きている体なんて……邪魔なだけ……」
ボーちゃんが、しんのすけを挟んでネネちゃんと反対のところに立つ。
「しんのすけ、お前もすぐに分かるさ。カスカベ防衛隊のみんなで一緒に逝くんだ」
「風間君……」
しかし、しんのすけはカスカベ防衛隊のみんなの制止を振り切ると、走り出して七輪を両手に抱えて目の前の窓に向けて放り投げる。ガラスは大きな音を立てて割れて、七輪は外に転がった。
「ふーっ…これで安心――」
「ヴヴヴ……」
安堵の息を漏らした直後、背後から獣のような唸り声が聞こえる。しんのすけは振り向くと、目の前にカスカベ防衛隊のみんなを含む倉庫内にいる全ての人間が、しんのすけに迫ってきた。
「おわっ？！」

いつものんびりとしているしんのすけでも、身の危険を感じて割れた窓から逃げ出す。
振り向くと、風間くんたちも倉庫から出てしんのすけを捕まえようとして、しんのすけは全速力で彼らから逃げるために住宅地を走り出した。太陽はすでに西に沈みかけていた。
住宅地を走り回っていると、突然、ぐにゃりとしんのすけの回りの景色が歪み始めた。それでも、おかしくなかった風間くんたちに意識してそれに気づかない。

「あれっ　ここどこ？」

そこでやっと異変に気付いて足を止める。見渡すと、まるで絵本のなかにいるような、不思議な世界が広がっており、絶えず景色が変わっていく。
やがて、どこからともなく楽しげな声とともに、植物の茎のように細い胴体と蝶のような翼を脚部に生やしカイゼル髭を生やした白い綿のような生き物がしんのすけに接近してくる。

「……わたあめ？」

さっきと比べて落ち着きを取り戻したしんのすけは、目の前の生き物に第一印象を口にした。
うえからチョキチョキと音がして、しんのすけは見上げると、有刺鉄線のような糸に絡まった枝切りバサミがしんのすけに接近してくる。
再度わたあめのような生き物をみると、鉛筆で円をめちゃくちゃに描いたような黒い不気味な目と、紫色の唇が生えていた。
生き物やハサミが、次々としんのすけの周りを囲んで、追い詰めていく。

「ど、どうしよう……バンジーきゅうすだ……」

突如、一つの爆発音が響く。
しんのすけと生物はその爆発音がした方向を向くと、そこから黒い煙が立っていた。
次に聞こえたのは、バン、バン、という銃声。同時にぎゃっ、とだみ声のような悲鳴が聞こえた。生き物たちの注意がそちらにそれたところで、しんのすけはすぐに物陰に隠れてその様子を見守った。
銃声とともに血も出ずに消滅する生き物たち。その光景に、「ほぉーほぉー……」としんのすけは声を出して見守る。
そして、煙と供に一人の少女が現れた。

ほっそりとした手足、華奢な体つき、黒い瞳に豊かに伸びる黒い髪。その美しい顔立ちは、口を一文字に結び、どこか人形のような無機質さを覚える。しんのすけにはそれらを比喩出来るほどの語彙は当然ないが、現れた美少女に目を奪われたことは間違いない。
美少女の手にはショットガンを一丁持っており、白と黒の学生服のようなものを身に固め、優美な足には黒いタイツを穿いている。
すぐそばで見ていたしんのすけに気付かず、少女はどんどん奥へと進んでいった。
赤面したしんのすけは、その美少女を追って、自分自身もついていくように奥へと進んでいく。
現れる白い生き物を、少女は機械的にショットガンで銃弾をばらまき、ショットガンの弾が切れると、左手に装備された盾のような円盤状の物体に収納され、代わりにアサルトライフルを取り出して発砲し白い生き物を蹴散らしていく。
その美しく華麗な姿に、しんのすけは見とれて、言葉すら出てこなかった。
やがてある程度白い生き物を倒していくと、目の前に扉が現れた。

少女はためらいもなくその扉を開けて、しんのすけも背後からこっそりと少女とほぼ同じタイミングで扉の中に入っていく。

扉の向こうには、広大な空間が広がっていた。
ドームの建物内にいるような形をしており、壁の模様が絶えず動いている。
空間の中心には、真紅の薔薇が咲き乱れており、その中心には見たことの無いグロテスクな怪物が、あの白い生き物や蝶を周りに取り巻きながらイスに座っていた。
怪物は、イモムシのような体に、８つの薔薇が顔に目の代わりのように咲いており、背には蝶の羽らしきものが生えている。足には無数の触手が生えている。
「あれ……なに」としんのすけは怪物の容姿に引きながら、少女に尋ねようとするが、その前に少女が飛び出して、アサルトライフルから大型の拳銃をそれぞれ両手に持って怪物に発砲していく。

「！」

少女の存在に気付いた怪物は、咆哮を上げながら自分が座っていた巨大なイスを投げつける。
しかし、少女は表情を崩さずに真っ向からイスに激突する――。
その瞬間、少女の姿が消えて、イスはしんのすけのすぐそばに激突した。
　しんのすけはイスに怖がって目を逸らしたが、次に見上げた時には少女はアサルトライフルを持って、怪物に狙いを定めようとしている。
そのとき、しんのすけは少女の足元に小さいサイズのあの白い綿の生き物が近づこうとしていたことに気付く。
しんのすけは迷わず少女の元へと向かって走り出した。

「おねいさん危ない！！」
「？！」

少女の腰に両手を押してぶつかるに成功し、少女がバランスを崩した。
瞬間、しんのすけは薔薇の蔓に変化した白い綿の生き物に拘束されて高く持ちあげられる。

「おわーーーっ！」
（――子供？！まさか結界に迷いこんで……）

少女は悲鳴をあげるしんのすけを見て、そこでやっと驚いて目を見開いた。
しかし、すぐに落ち着きを取り戻すと、少女はアサルトライフルを薔薇園に向かって発砲する。

「！！」

アサルトライフルによって悲惨な状態になった薔薇園に怪物は気付いて目の前の少女から薔薇園へと意識を集中させる。
その隙に少女はガトリング機関銃を盾から取り出して、怪物に向けて発射した。

「ガ　ア　ア　ア……！！」

何百発という銃弾が怪物に襲い掛かり、銃弾を浴びた怪物は断末魔の声を途切れ途切れに発しながら光の炎と化して消滅した。
同時に大量の蝶が舞い、しんのすけの拘束も解けて地面に着地する。

そして再び景色が歪んで、気が付くとしんのすけと少女は住宅地の路地に立っていた。
しんのすけは少女の方を向くと、少女は何かを拾っていた。
そういえばさっきまであった重火器が消えて、あの制服のような白黒の服から胸元にリボンがつけられた学生服に変わっている。
しかし、しんのすけはそんな事も気にせずに少女に近寄る。

「ねぇ、おねいさん――」
「…？」

少女がふりむいて、しんのすけは一瞬ドキッとした。ただ単純に恥ずかしいのだ。
すると少女が先に口を開いた。

「あなた、怪我とかしていないかしら？」

そこでいつもの調子に戻ってしまったしんのすけは、かすかに笑みを浮かべて膝に手を当てると

「ちょっといたーい。すりむいちゃったかもー」
「そう、擦りむいた程度なら平気ね」
「お……おねいさん…意外につめたいゾ……」

痛がって甘える作戦が失敗し、少女に冷たく突き放されてしんのすけは軽いショックを受ける。
しかし、少女のお陰で助かったことに変わりなく、しんのすけは少女に頭を下げた。

「おねいさん、助けてくれてありがとございました！」
「礼には及ばないわ。むしろ礼を言うのはこっちのほうかしら」

「え？」

思わぬ返答が帰ってきて、しんのすけは我が耳を疑う。
少女はぐるりとこちらを向いてしんのすけを見下ろす。その表情は心なしか微笑んでいるように見える。
しかし、すぐにまた無表情になって少女は続けた。

「あなたにちょっとした『借り』が出来たわね。いつかこの借りは返すわ」
「えっと、あの、おねいさん、名前は？」

名前を尋ねると一瞬の間の後、少女はぐるりとしんのすけに背を向けた。
しんのすけはヘンなこと言っちゃったのかな、と思い始めたとき、少女は口を開いた。

「――暁美（あけみ）ほむら」
「ほむら……ちゃん？」

そして、暁美ほむらと名乗った少女はそのまま置いてあった鞄を持って、二又に分かれている黒髪を揺らしながら歩き出した。

「オラ、野原しんのすけだゾ！ほむらちゃん、またあおーね！！」

そう言って、しんのすけはほむらに向かって目を輝かせながら手を振って見送った。

【つづく】

1．夢の中で出逢った、ようなだゾ（後書き）

次回予告
ほむらに命を救われたしんのすけは、その翌日、野原一家とキュウべえを連れてサトーココノカドーへ向かう。
そこで再びほむらと再会するが、ほむらはそこでキュウべえをさらってしまう。
しんのすけは一人と一匹を追い、やがて銃をつきつけてキュウべえを尋問しているほむらを見つける。
ほむらはキュウべえと供に姿をくらまし、しんのすけは再びほむらを見つけてなぜキュウべえを傷つけるのか尋ねるために、ある場所へと向かうのだった――。

小説　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ六人の魔法少女たち　ぱーとつー　お楽しみに！！

2．奇跡も、魔法も、あるんだゾ（前書き）

【前回までのあらすじ】

よ、オラ、野原しんのすけだゾ！
オラ、この間めちゃくちゃになった春日部と、二人のおねいさんが戦っていて、シロのそっくりさんからひまにケーヤクしたいっていう変な夢を見たんだゾ。
夢から覚めたあと、その事をカスカベ防衛隊のみんなに話そうとしたんだけど、どうやら話題が違ってたらしい。
そのあと、家に帰る途中にオラの家の庭で、怪我をしたキュウリ君を見つけて治したんだゾ。
キュウリ君は父ちゃん母ちゃんにはみえてなくて、オラとひまが見えるんだゾ。
なんでオラとひまにしか見えないのか、それはキュウリ君がひまとケーヤクして魔法少女になってほしいんだって。オラはただのつーやくだけとか、ずるいゾ！

そんなこんなで、オラは風間くんたちとトシデンテツの秘密を探検するために公園にむかったんだけど、そこで様子が変な風間くんたちと一緒にへんな倉庫に連れてかれて、なんと風間くんたちは死のうとしたんだゾ！なんとかオラは風間くんたちを死なせることを阻止してその場から逃げようとしたんだけど、変な場所に迷い混んじゃったの。

んでわたあめのような生き物に囲まれちゃうんだけど、そこでてっぽー持ったおねいさんがオラを助けてくれたんだゾ。
そのおねいさんはあけみほむらちゃんって言って、いつかオラに『かり』を返すって言ったんだゾ。でもオラ、ほむらちゃんになにも

借りていないんだけど、何を返すつもりなんだろ？

2．奇跡も、魔法も、あるんだゾ

暁美（あけみ）ほむらと名乗った少女と別れたその夜――。

夜、帰宅後したしんのすけは、門限を破って怒ったみさえのげんこつが飛んでくると思い、ほむらと出会った時の勢いはどこへいったのやら、おそるおそる家のドアを開けると、ドタドタとした慌ただしい足音と供にみさえとひろしがしんのすけに駆け寄ってきた。怒られる――としんのすけは目を閉じたが、掛けられた言葉は思いもよらなかった。

「大丈夫？しんちゃん……」

「え？」

目を開けると、心配そうにこちらを覗くみさえとひろしの顔があった。

ひろしが試しにしんのすけの身体を確認する。

「よかった、どこにも怪我はなさそうだな」

「しんちゃん、一体どこに行ってたの？」

「えーっと……」

しんのすけは取り敢えず、今日、公園に向かう途中風間くんたちと出会って様子がおかしかったこと、そして倉庫にに連れられて知らない大人たちと一緒にイッカンサタンソチュドウクになって自殺を図ろうとしていたこと、そして謎の化け物に襲われたところをほむらに助けてもらった事を話した。

しんのすけの話を聞いたひろしとみさえはお互いに顔を合わせてしんのすけの話を理解しようとする。

「どういうことかしら……？」
「つまり、こういうことなんじゃないか…？」
ひろしはしんのすけの話を聞いて、『風間くんたちと遊びに行く途中、しんのすけたちは知らない大人たちについていって、大人たちがしんのすけたちを無理心中を図ろうとしたところ、ほむらと名乗った少女がしんのすけたちを助けてくれた』と解釈した。
「実はね、しんのすけ。３時間前に風間くんのママがうちに連絡してきたの」
風間くんは元々、塾に通っているためいつも遊ぶときは早く帰るのだ。しかし、いつもは時間通りに帰ってくるはずの風間くんが帰って来なかったことに風間くんのママが異常を感じて、野原家や他のみんなに連絡して回ってきたのだ。
「それじゃあしんのすけ。今は風間くんたちは家にまっすぐ帰っているのか？」
「うん」
ほむらと別れたあの後、倉庫に戻ると倒れている風間くん以下カスカベ防衛隊のみんなを見つけた。しんのすけは試しに起こしてみると、起き上がってそれぞれ塾に遅れるやら――門限が破られるやら――とにかく、いつものみんなに戻っていた。そのあと、みんなは帰路についたのだ。今頃家に着いている頃だろう。
「ま、とにかくみんな無事で良かったよ」
ひろしは安堵の息を漏らして、しんのすけの頭をポンと軽く叩いた。

「今、風間くんのママに連絡するから晩ごはんはちょっと待っててね」
「ホッホーイ」
先にしんのすけとひろしがリビングに戻り、みさえは靴がしまってある棚の上に設置されている電話を取って、連絡をする。
「やあ、しんちゃん。遅いお帰りだね」
寝室に向かうと、ひまわりにいじられているキュゥべえがしんのすけの帰りを待っていた。
「おお！キュウリ君。おかえりー」
「ただいまでしょ。君の親の言葉を聞く限り、門限は5時らしいじゃないか。君のお母さんの恐ろしさを分かっているなら、たぶん時間通りに帰ってくると思ったんだけども」
「うーん、オラもいつも母ちゃんのげんこつが怖いからすぐに帰るんだけどね」
「なにかあったのかい？」
しんのすけは再びひろしとみさえに説明したように、キュゥべえに対して同じように説明を繰り返した。キュゥべえはふむふむと興味深そうに聞き入る。
そして話し終えて、キュウべえは口を開いた。
「命拾いしたね、しんちゃん」
キュゥべえの言葉に、「なんで？」としんのすけは尋ねる。

「君が出会ったあの怪物は、『使い魔』と『魔女』と呼ばれる存在だよ」
「魔女？」
しんのすけはそこで、帽子を被り黒ずくめの衣装に杖を持った老婆を思い浮かべる。
しんのすけの考えを読み取ったように、キュゥべえは言葉を続けた。
「魔女と言っても、君の考える魔女とは違うよ」
「みんなあんなのなの？」
「そうだね。それにみんな途方もなく強い。魔法少女はみんな、ああやって魔女を倒すことが仕事なんだ」
それでさえ、戦って死んじゃう魔法少女は多いんだけども、とキュゥべえはふっとひまわりに目をそらした。
ふと、しんのすけはキュゥべえが契約した魔法少女ぐらいしか倒せない、と聞いて、魔女を重火器を巧みに操って倒していたほむらの姿を思い出した。
「じゃあオラが出会ったほむらちゃんも、魔法少女なのかな」
「ほむらちゃん……？」
しんのすけが呟いた言葉に、キュゥべえはぴくりと反応する。ついでに言えば、しんのすけは魔女や使い魔の所を説明して、いったん言葉を途切ったため、ほむらのことに関することはしゃべっていない。
「知ってるの？」
「まあ…ね。色々と」

ほむら、と聞いてはキュゥべえふいに顔をしかめた、その様子を見てしんのすけは、

「ほうほう、ほむらちゃんとキュウリ君は肉体関係にあるわけですな」

「……意味知ってて使っているのかい？それを言うなら敵対関係じゃないの？」

「そうともいう～」

「ハァ……」

のんきなしんのすけに、半ば呆れながらも、キュゥべえは一種の危機感を覚えた。

（まずいね、ほむらはもうここまで追ってきたのか…。）

「しんのすけーごはんよー」

リビングのほうから、みさえののんびりした声が聞こえる。食事の準備が出来たのだろう。それにしてもえらく早く準備が早い。

「ほーい、いま行くー」

しんのすけとひまわり、キュゥべえはリビングに移動して、テーブルの上に置いてある食事に目を見張った。

「母ちゃん……これ……」

「ん？どうしたの」

出された食事の内容に、みさえは「なにか？」と平然な表情でしんのすけは見る。

テーブルの上に乗せられた食事――それは、誰がどうみても晩御飯という観点から見れば質素すぎる食事であった。
茶碗半分ほどのごはんに、小皿に乗せられた海苔、それと少量のみそ汁。それだけである。

「……わけがわからないよ」

用意された食事を見て、キュゥべえは思わず言葉を溢した。その言葉にしんのすけは激しく同意する。
しんのすけの心情を察したひろしとみさえは二人そろってクスリと笑った。

「しんのすけ、これを見ろよ」
「え？」

ひろしがそばに置いてあるものを、しんのすけに見せる。それは白い紙に包み込まれており、触ってみると柔らかい。

「なにこれ？」
「牛肉よ、帰ってくる前に九州の実家から送られてきたの」
「おおっ！」

さっきまでの低いテンションから、一気にしんのすけは頬を紅潮させて興奮する。

「じゃあ、じゃあ明日って……」
「すき焼きよ。今日は給料日前だから、明日サトーココノカドーで食材をそろえようと思うの」
「やったー！オラもいくーッ！！」

喜ぶしんのすけを見て、みさえたちもつい笑みがこぼれる。本当にこの子は素直なんだから。

「よかったね、しんちゃん」

一連の流れを見ていたキュゥべえが祝福する。しんのすけはキュゥべえの方を向いて、うんっと頷いた。

「よかったらキュウリ君もごいっしょしない？」
「僕もいいのかい？」
「うん、いいよ」
「じゃあお言葉に甘えていただいちゃおうかな」

キュゥべえ一緒に食べることになり、再びしんのすけは喜びをあらわにする。
しんのすけはみさえとひろしへと向くと、みさえたちはしんのすけに不安そうな視線を送っていた。

「しんのすけ、今、誰としゃべっていたんだ？」
「えっ？……えーと……」

いっぺんキュウべえを見て、そして再び尋ねたひろしを見る。

「休園が終わったら、すぐに幼稚園で劇をやるのよ。今、その練習をしているのよ」

みさえが助け船を出してくれた。しんのすけはすぐに「そうだゾ！」と答えてご飯に手を付ける。みさえはしんのすけが目を逸らしたところを見計らって、ひそひそとひろしに話した。

（実はね、昨日からこんな感じなの。一体何かあったのかしら？）
（さあなあ……。変なものでも食ったんじゃねえのか？）
（テレビの真似事だったらいいけど――）

みさえとひろしは食事の手を止めて、再びしんのすけを見やった。

「やっぱりおなかいっぱいにならないゾ」

時が進んで一時間後、風呂からあがったしんのすけはやはりあの食事だけでは空腹は満たされず、「もっと食わせろ！」と言わんばかりにしんのすけのお腹は鳴っている。

「我慢しようよ。明日の晩御飯はすき焼きなんだから」
「うーん……」

キュゥべえに諌められるが、やはりしんのすけとしては納得がいかないようだ。
そこへひまわりがハイハイでしんのすけとキュウべえの間に割ってやってきた。
そこではキュゥべえ「あっ」と声を漏らして思い出した。

「そうだ、しんちゃん。ひまわりちゃんとの契約の話、忘れてないよね」
「おお、こってり忘れてた。ひま」

しんのすけの呼びかけに「たい」とひまは答えると、しんのすけはひまわりを抱きかかえてキュゥべえの方を向いた。

「ひまわりちゃん、君は僕と契約して、魔法少女になってくれるかい？」

キュゥべえはひまわりの目を見て、答えを待つ。

「たい！」

キュゥべえの問いにひまわりは頷く。一瞬、キュゥべえの口元がつりあがる。

「じゃあ、ひまわりちゃん。君が『魂を差し出すに足る程の願い』を言ってごらん。どんな願いだって、ひとつだけ叶えてあげるよ」

寝室に静寂が訪れる。しんのすけもキュゥべえもひまわりの次の言葉を待つ。

「たい！たいたーい。とーていたい！」

「……なんて言ったんだい？」

キュゥべえは期待を寄せながら、しんのすけへと視線を変える。

「まだ決まってないって」
「ズコーーーーッ！」
しんのすけが平然と答えて、キュゥべえは勢い余ってずでででっと倒れる。
「あたりまえだゾ。ひまは母ちゃんにて『ヨクブカ』だから。迷うのはとーぜんだゾ」
「は……はは…そうかい」
苦笑いを浮かべながら、キュゥべえは立ち上がった。ズッコけた際に擦りむいたのか、額を手で押さえている。
しんのすけはひまわりを抱きかかえて場所を変えて、窓を開けて縁側へ出る。夜空を仰ぐと満月が出ていた。その隣に、キュゥべえが座る。
「ねぇキュウリ君。ひまも魔法少女になたら、ほむらちゃんみたいにああやっててっぽーもって戦うの？」
しんのすけはそう言いながら、赤ん坊のひまわりが、ほむらのように重火器を使って魔女を倒す光景を想像しようとする。しかし、しんのすけの豊かな想像力でもイメージは困難なようだ。
「どうだろうね、願いの内容によって得る力は変わるから。そうそう、最近僕が契約した魔法少女たちは剣とか弓とかを武器にして戦っているよ」
「ほうほう」

「そうだ、一つ面白いことを教えてあげようか？」
「なに？」
キュゥべえは、魔法少女にも才能やセンスがある、と説明をした。
「僕はただ少女をみて契約しているワケじゃない。一種の才能がある人だけにしか姿を見せないんだよ」
「ほう。じゃあひまにもその才能はあるの？」
「もちろんさ！いいや、それだけじゃないよ。ひまわりちゃんは僕が今まで見てきたなかでで二番目に素質があるよ。もしかしたら、最強の魔法少女になれるかもしれない」
「おお、それはすごいですな。よかったなぁひま」
「うきゃ？」としんのすけの腕の中でひまわりは首を傾げる。話の内容が分かっていないようだ。
「じゃあ、一番そしつがある魔法少女ってだれなの？」
ほむらちゃん？とたずねると、いいやとキュゥべえは首を横に振った。
「ひまわりちゃんの願いが決まって、魔法少女になったら紹介してあげるよ」
「オケチ」
昨日のように、ぶぅと頬を膨らませてキュウべえにそっぽを向く。
そしてもう今日は色々あって疲れたのか、みさえに促される前に早めにしんのすけとひまわりは床につくようにした。

キュゥべえは、一度すやすやと寝息を立てているひまわりを見やると、静かに窓を開けて外に出て行った。
なるべく人目の付かないところを忍び足で歩き、塀の上を猫のように駆けていく。
やがて、かわのそば公園と呼ばれる、牛の尻公園とはまた違う公園へとキュゥべえは塀から降り立った。

「よぉ」

キュゥべえを待っていたその少女は、木に背をもたれさせながら、挨拶するように手を上げる。少女は月に照らされた木の陰に隠れているので姿かたちは分からないが、口にはなにか細長い棒状のものを加えている。

「すまないね、待たせちゃって」

少女に接近して、キュゥべえは「お座り」の体勢をとる。

「べっつに。それにしてもアンタから魔女狩り以外の用で呼ぶなんてどういう風の吹き回しだい？」
「頼みがあるんだ。君にしか出来ない仕事だ」
「なんだよ、めんどくさい用事ならお断りだよ」
「それはどうかな」

キュゥべえは『仕事』の内容を少女に話す。話を聞いていくうちに徐々に少女の表情に怒りの色が現れていき、口に加えている棒状のものもいとも簡単に折れて拳がわなわなと震える。

「――ッなんだよ……そいつら……人間のクズのクズじゃねぇか……。おい、とっとと場所教えろ！待ってろ、今すぐ皆殺しに……」
「待ってよ！気持ちは分かるが落ちついてくれ。彼らにスキは無いんだ。それに下手に暴れればマミが黙っちゃいない」
「だがよお！」
「落ち着いて話を聞いてくれッ！」

キュゥべえが怒鳴り声を上げて、少女は驚いて少しばかりたじろぐ。

「できれば、事を穏便に済ませたい。今のように君が暴走しかけて下手に騒ぎになったら困るんだ。君はしばらくはこの辺りで魔女狩りをして欲しい。チャンスが来たら僕はすぐに場所を君に伝える。それでいいかい？」
「……」

納得できない、といったふうに少女はキュゥべえを見下ろすが、やがて諦めたように舌打ちをついて両肩を上げた。

「チッ……わーったよ。だが、もしその時になって殺されてた、なんてなってたらアタシは本気でキレるかも知れねェ。そのくらいは承知しろよ」
「大丈夫、その前に助け出すよ。それじゃ、僕はそろそろ行くよ。なにしろ追われている身なんだ」

くるりと背を向けて、キュゥべえは再び猫のように走り出して公園を出て行く。少女は、無言でキュゥべえを見送っていった。

――その翌日、午前１１時。

しんのすけたち野原一家とキュゥべえは、晩ごはんのすき焼きの具材を買いに大手総合ストアのサトーココノカドーへと向かった。
あまり、外に出たがらなかったキュゥべえも、彼いわく「ひとり家にいても危ない」らしいので、しんのすけの頭の上に乗ってついていくことにしたのだ。
車で移動して２０分後、サトーココノカドーに到着して、早速野原一家たちは食品売り場に向かった。

「しんのすけ、今日はお菓子は一つだけよ」
「えーっ…おきゅうりょう入ったのに？」

前まで３００円分まで複数のお菓子を買ってもらったしんのすけにとって、これはげんこつよりもキツイ仕打ちである。

「今日は高い食材を買いたいの。あまり無駄なことに使いたくないのよ」
「オラのおかしを買うのってそんなにむだなことなの？！」
「無駄」

涙ながらに訴えたしんのすけの言葉はあっさりとみさえの放った二文字の単語に切り捨てられて、しんのすけは落ち込みながらお菓子売り場へと向かった。

「まあまあ、そう落ち込まないでよしんちゃん。その分だけ晩ごはんのすき焼きはおいしいと思うよ」
「ほーい……」

キュゥべえが慰めてくれるが、それでもしんのすけの落ち込みは治りそうに無い。
みさえたちと別れて、とぼとぼとお菓子売り場に向かって、どれに

するか選ぶことにした。

「うーん、どれにしようかな？」

「そういえば、僕の知り合いの魔法少女はいつもこのお菓子を買ってたなぁ」

「どれどれ」

キュゥべえは近くに置いてある小さなクッキーの棒にチョコレートが塗られたお菓子が沢山入っている箱の『ロッキー』を指差した。

「おお、ロッキーですか！ポキッポキッとしたアレがいいのよねぇ～」

しんのすけとキュゥべえはあれこれ言いながらどんなお菓子を選んでいると、一人の少女がお菓子売り場の近くを通りかかった。

「――！」

――少女、暁美ほむらはしんのすけよりも、すぐそばでお菓子を選んでいるキュゥべえと目があった。お互いに目を見開いて驚く。

「ほむ――」

（キュゥ――）

「ん？おお！ほむらちゃん！」

運が悪いことに、振り向いたしんのすけはすぐに胸元にリボンがある学生服を着たほむらの存在に気付いて、キュゥべえとほむらの間に割って入るように近づいてきた。

「あなたは……」

「土（奇）偶ですな、ほむらちゃん。オラのことおぼえてる？」

「…覚えているわ、野原しんのすけでしょう」
「おお、おぼえてていたの？えへ～オラ、うれしいゾ」
しんのすけが照れ笑いを浮かべている間、ほむらは視線をしんのすけからキュゥべえへと視線を変えた。自分が足止めのために撃ち抜いたわき腹に包帯が巻かれている。
（この子が治療したの……？）
それに、一緒に行動しているところを見ると、キュゥべえはしんのすけの家に居候していたことになる。
とにかく、自分が目を離していた間なにをしていたのか、そしてその他もろもろ聞き出すために、ほむらは行動を開始した。
「いや～実はオラ、おかしを選ぶのに迷ってるんだけれど、ほむらちゃんのオススメのおかしはな――」
「しんちゃん、逃げるよ！！」
キュウべえが悲鳴を上げた瞬間、しんのすけの目の前でほむらとキュゥべえが消えうせた。ほむらが立っている場所には買い物カゴしかない。
「あれっ…ほむらちゃん？」
キョロキョロと辺りをしんのすけは辺りを見渡すが、ほむらどころかキュゥべえさえ消えてしまった事に気付く。
「キュウリ君？ほむらちゃん…？」
呼んでみるが、一人と一匹からの返事はない。

すると、しんのすけは出口の方角に、あの魔女と戦ったときの服装のほむらがキュゥべえを抱きかかえながら走り出している事に気付いた。

「しんちゃん、助けて！」
「た、たいへんだ～！キュウリくーん！」

しんのすけは血相を抱えながらも走り出し、ほむらを追った。
ほむらは周りの人々にかまわず、店の出口へと向かっていく。
すると、偶然通りかかったひろしとみさえが、ひまわりを乗せたベビーカーとカートを押しながらほむらの存在に気付いた。

「うわっ、なんだ？！」
「危ない！！」

ほむらは止まる気配は無く、あわやぶつかる――その瞬間、フッとほむらの姿が消えた。

「……え？」

ぶつかる衝撃が襲ってこない。ひろしとみさえは閉じた目を開けてみると、そこにはほむらの姿は無く代わりにこちらに向かって走ってくるしんのすけの姿があった。

「しんのすけ？！」
「なにやってんだ？！」

二人はすぐに気付くが、しんのすけはほむらとキュゥべえに意識を集中しており、二人の声は聞こえない。それどころか、二人を障害物としか見えていない。

しんのすけは足に力をためて、みさえ達との距離が残り１．５メートルというところまで来た。
そして足の力を地面に放出するように解放し、跳躍した。一気にみさえのカートを飛び越えて、両足を揃えて向こう側へ着地した。
二人の呼び止める声をよそに、しんのすけはサトーココノカドーを出て、辺りを見渡す。

「しんちゃん、こっちだ！」
「ほい！」

キュゥべえのテレパシーが左から聞こえる。
しんのすけはキュウべえの言われた通りに左に曲がって、街道を走り出す。

「！」

街道の中、キュゥべえを抱きかかえて走っているほむらは、はるか後ろにしんのすけが追ってきていることに気付いた。
ほむらは目に付いた曲がり角を曲がった先の道で、そこで再び姿を消した。
そこへ追いついたしんのすけはほむらを見失い、困惑したところで再びキュゥべえのテレパシーがしんのすけの頭に響く。

「しんちゃん、そこを真っ直ぐ行って、ぶつかった所の角を左にまがるんだ。急いで！」
「ほい！」

キュゥべえの指示通り、しんのすけは見慣れぬ小路を走って、その先の壁を左へと曲がった。
するとまた別の街道へ出て、キュゥべえの指示を待つが、一分経っ

てもテレパシーが送られてこない。一体どうしたのだろうか？

「キュウリくーん……？ほむらちゃーん……？」

呼んでみるが、返事が帰ってくる気配は無い。

しかし、しんのすけは諦めることなくこの街道を探し回ってみるが、どこにも一人と一匹の姿はない。

次にさっき通った迷路のような小路を歩き回ってみると、すぐそばで無機質な少女の声が聞こえた。

「……の思い通りにはさせない」

（お？）

しんのすけは、声のした方向へ忍び足で歩き、まるで潜入したスパイのように角越しに向こうを覗く。

そこには、大型の銃を突きつけたほむらと、無表情で向かい合っているキュゥべえの光景だった。

「もう一つ、聞かせてもらうわ」

凛としたほむらの声が小路に響く。

「あなたは、野原しんのすけという子供の家で何日か居候していたのでしょう？その包帯と、あんなに馴れ馴れしく付き合っている姿を見れば分かるわ」

しかし、キュゥべえはほむらに対してなんの返答もしない。しばらくの間の後、再びほむらは口を開いた。

「ええ、でも今は関係のないことだわ。それよりも、あなたは彼ら

のなにが狙いなのかしら？」
再び沈黙が訪れるが、先ほどの空いた間ほど長く保たなかった。
「そう、なら否が応でも聞かせるしかないわね」
言って、ほむらは拳銃の銃口を、キュゥべえの足へと向けた。
そしてトリガーを引こうとしたその瞬間――。
「だめだゾ！！」
「――？！！」
しんのすけの悲痛な叫びがほむらとキュゥべえに届いて、驚いたほむらとキュゥべえは背後を向くと、しんのすけが立っていた。
「野原しんのすけ――」
「しんちゃん、僕を助けてくれ！」
ほむらが呆気にとられている隙に、しんのすけは再び（シチュエーションは全く違うが）キュゥべえとほむらの間に割って入り、キュゥべえを守るように両手を広げた。
「ほむらちゃん！確かにオラたち、昨日おしりあった仲だからわからないけど、いっしょにケーヤクしたキュウリ君をどうしていじめるの？」
「あなたには関係のないことよ。そこを退きなさい」
「やだっ！」
「……そう」
断固、断るしんのすけに、ほむらはキュゥべえにしたように、しん

のすけに銃を突きつける。もちろん撃つつもりはない。脅しのつもりだ。

「うつならキュウリ君をうてーっ！」

「なんで？！」

「……」

しんのすけとキュゥべえのやりとりに呆れながらもほむらは銃を下げ、盾の中にしまうと、フッと姿を消した。

「あれ？」

「しんちゃん！」

後ろからキュゥべえの声が聞こえて振り向くと、ほむらがキュゥべえを脇に抱えながら壁の上で仁王立ちでしんのすけを見下ろしていた。

「野原しんのすけ――」

再びほむらはしんのすけをフルネームで呼ぶ。

「もう二度と、私とこいつに関わらないことね。今までのように、平和な生活を送りたければ――」

そうしんのすけを睨みながら冷たく言いはなって、ほむらは塀から向こう側へ飛び降りていってしまった。もうキュゥべえのテレパシーも聞こえない。

ほむらが立ち去った後、しんのすけは呆然とほむらが立っていた場所を見上げていた。足に根が生えたように動かない。

「しんのすけ！しんのすけ！」

聞きなれた男の声が聞こえる。後ろに目をやると、案の定ひろしだった。近づいてきた。ひまわりとみさえはサトーココノカドーで買い物をしているのだろう。

「ああ良かった、ここに居たんだな」

ひろしがしんのすけのそばに近づいてきて、しんのすけの顔を覗く。

「どうしたんだ？しんのすけ。何かあったのか？」

しんのすけはいつものボケーッとした表情をしているが、心なしかうつろな雰囲気が漂っており、ひろしはそれをすぐに感じ取れた。

「どうしたんだ？」

今度はやさしい声で尋ねる。すると、しんのすけはぐるりとひろしの方を向いた。

「ううん、なんでもないよ。もどろ、父ちゃん」

「え――あ、おう……」

先にしんのすけが元来た道を歩き出した。その落ち込んでいるような後ろ姿を、ひろしは心配そうな顔をしてついていくしかなかった。

その夜、結局肝心のすき焼きのタレを作るための調味料を具材に夢中になって買うのを忘れてしまい、すき焼きはまた今度、ということになってしまった。
いつもならしんのすけは買い忘れたみさえに文句を言うところだが、今日はなにも言わずに寝室の縁側で夜空を見上げているだけだった。

「たい」

縁側で夜空を見上げているしんのすけに、ひまわりがハイハイをしながら近寄ってきた。それにしんのすけは気付いて顔を向けた。

「ひま、ごめんね。キュウリ君ほむらちゃんにつれてかれちゃったから、魔法少女になれないかも」

「たぁ……」

残念ね、とでも言いたげにひまわりはうつむいた。
しんのすけは再び夜空を見上げ、夜空に、魔女を倒したばかりの時にかすかに自分に笑いかけてくれたほむらの顔を投影する。

「ほむらちゃん……」

しんのすけはほむらが塀の上からしんのすけを見下ろしていた時を思い出した。実はしんのすけはほむらのスカートの中身が見えていたのだ。

（いやーいいもん見ちゃったなあ～ほむらちゃん、黒なんだなぁ～）

「……」

その下品な事を思い出しているのは顔に出ており、ひまわりは「へ

っ」と軽蔑するように声を出してしんのすけを見た。

「あ……」

ひまわりの視線に気付き、しんのすけはほむらのスカートの中身に関することを切り離して、真剣に考える。
一体、キュゥべえとの間になにがあったのだろう。あんなふうにやさしく笑ってくれるおねいさんに、悪い人はいないはずだゾ。
しんのすけはすっくと立ち上がると、口を一文字に結んで拳をぐっと握った。

（もっかいほむらちゃんに聞いてみよう！）

真っ正面から、一対一で堂々と。それに何を貸したたのか知らないけど、『借り』を返してもらわなくちゃ。それも武器になるかも。

「よーし！やってやるゾ！」

はりきってしんのすけは拳を掲げるが、そこでふっとある事がよぎった。

（だけど、どうやって探したらいいんだろ？）

昨日出会ったばかりで、名前と容姿しか覚えていない。住所や通っている学校も分からない。見た目からして中学生っぽいけど。
そこでしんのすけはカスカベ防衛隊に聞いてみよう、と考えた。みんなならなにか知っているかもしれない。
しんのすけは思い立ったらすぐに行動するタイプで、縁側から玄関まで走ると、電話の受話器をもちながら最初に風間君の家に電話を掛けてみた。

――翌日、牛の尻公園にて。

「どうしたんだ？急に僕らを呼び出して」

牛の尻公園の中心にあるドームの遊具の中で、しんのすけと風間君以下カスカベ防衛隊のみんなが輪になってしゃがんで集まっていた。

「こないだの都市伝説の探検の続きでもするの？」

「ううん、違うの」

ネネちゃんの言葉にしんのすけは首を横に振って、ポケットから一枚の紙を取り出した。

白い紙には、クレヨンで一人の人間の絵が描かれている。昨日の夜、しんのすけがめいいっぱい思い出して描いたほむらである。

「だれ？この人」

「女の人みたいだけど……」

「暁美ほむらちゃんだゾ」

「ほむらちゃん……？」

訝しげに風間君は紙を手にとってほむらの絵をにらめっこをする。

「この人を探しているの？」

マサオ君が尋ねる。

「うん、ちょっとね」
「んー……こんな人見たことないなあ…。だけどこの女の人が着てる服、どっかで見たような…」
「ちょっとみせて……」

ボーちゃんがちらりとその絵を見てなにか引っ掛かったようで、風間君はボーちゃんにほむらの絵を渡した。
しばらくボーちゃんがその絵を見ている間、静寂が訪れてしんのすけたちはまばたきも忘れてしまい、まるで合格発表を待つ受験生のようにボーちゃんの次の言葉を待つ。

そして見終わったのか先に絵をしんのすけに返して、ボーちゃんは言った。

「僕…この人は知らないけど…この人の着てる服なら知ってる」
「もう、服の種類なんか知ったってどうにもならないでしょ」

ネネちゃんが期待はずれ、とでも言いたげに口を尖らせるが、「いや」と風間君が左手で制してネネちゃんの反応を否定した。

「そういう意味じゃないよ。これ、確かなんかの学生服だよ。なんの学校か忘れちゃったけど」
「……風間君、そのとおり。これは……たぶん『春日部中学校』の学生服だと……思う」

風間君とボーちゃん以外の三人は「春日部中学校？」と、声を揃えて言った。一方風間君は「そうだ！！」と頭の中で理解の光が灯って、左手の拳で右手のひらを叩いた。

「そうだよ！思い出した！春日部中学校の制服だよ！」
「ほうほう、でもなんで風間君とボーちゃんは知ってるの？」
しんのすけの問いにそりゃあ、と風間君はキザっぽく、髪をかきあげる。
「幼稚園バスを待ってるときマンションから学生さんが出て行くのをよく見るからね」
「……僕の…知り合いが……通ってるから」
「それじゃさ、その春日部中学校の場所って分かる？」
風間君は実際に行ったことが無いため首を傾げるが、「ちょっと待って」とボーちゃんがポケットから鉛筆と消しゴムを取り出した。
「しんちゃん……裏に書いてもいい？」
「いいよ」
しんのすけはボーちゃんにほむらの絵を再び渡して、ボーちゃんはしゃがんでさらさらとここの公園からだけでなくしんのすけの家からの道のりを書いて、その場の全員を驚かせた。
「すごーい…ボーちゃん」
マサオが感嘆のため息を漏らして、一瞬ほめられてうれしかったのかボーちゃんはにっこりと笑った。
やがて地図を描き終えただけでなく、今度はここからの道順までしんのすけに分かりやすく、かつ、単純な説明書きまで追加してくれた。

「これで大丈夫だと思う……」

そう言って、ボーちゃんは地図をしんのすけに返した。

「おーっ！ボーちゃんありがとー！」

「どういたしまして…」

地図を受け取ったしんのすけは立ち上がると、「じゃ」とだけ告げてドームからしんのすけは出て行こうとした。それを風間君が引き止める。

「ちょ、ちょっと待てよ！これから中学校に行く気なのか？」

「うん、そだけど？」

キョトンとした表情でしんのすけは風間君を見る。

「なに考えてんだよしんのすけ、いま授業中だぞ！今行ったってつまみだされるだけだぞ！」

「ほうほう、オラ、おつまみならカキピーが大好きだゾ」

「そのつまみじゃない！！」

風間君がツッコんでいる間に、しんのすけは再び駆け出していって公園を出て行ってしまった。「お、おい！」と風間君がまた引きとめようと手を伸ばすが、そこをネネちゃんが風間君の肩を掴んで留まらせた。

「きっとしんちゃん、そのほむらちゃんって人にどうしても会いたいのよ。行かせてあげたら？」

「……」

勝手だなあ、と風間君は思いながら伸ばした手を下げて、しんのすけが走っていった道を見据えた。

「ねぇ、せっかく集まったんだからなにかして遊ばない？」

そこへ今回あまりしゃべっていないマサオ君が、ここぞと言わんばかりに切り出してきた。

「そうだね、じゃ、なにして遊ぼっか？」

「じゃあネネ、リアルおままごとしたい！」

「ゲゲッ！！」

しんのすけの後をついていけばよかった、と後悔しながら引きつった表情を浮かべる風間君、マサオ君、ボーちゃんの三人であった。

しんのすけはボーちゃんが書き加えてくれた地図を頼りに、着実に春日部中学校へと向かっていた。

やがて遠くに所々ガラス張りの近未来的な建物が見えて、しんのすけはいっぺん地図を見ると『ガラスがたくさんあるたてものがみえたら、そこがかすかべちゅうがっこう』と最後の説明文を見て、もう一度確認するように建物を見てボーちゃんの説明文と合致した。

「おおっ！あれだ！」

しんのすけは嬉々としながら建物へと走り寄って、校門の前に立った。

校門はピシャリと閉じられており、学校を囲う塀もしんのすけの何倍も高い。

確かに風間君の言う通り授業中のようで、校舎の中でガラス越しに

生徒たちが授業を受けているのが見える。
しかし、構わずしんのすけは塀をよじ登ると塀の上を歩き回って木の枝が塀に伸びている場所を見つけた。しんのすけは木の枝に飛びうつって、木の幹を使ってするすると降りて学校内に入り込んだ。植えられている茂みや木々に隠れながら校舎に向かっていく。

しかし、しんのすけの存在は一人の少女がすぐに気付いた。

（――男の子？）

桃色の髪を可愛らしいリボンで結ったツインテールが特徴の少女がふと何気に窓の外を見下ろすと、学生達が通る大通りの両側に植えられている茂みに、赤いトレーナーを着た小さな――ちょうど少女の弟よりすこし歳上な感じがする男の子がこそこそと隠れながら校舎に向かってくるのが見えた。

「どうしたの？まどか」

まどかと呼ばれた隣に座っている青いショートヘアの少女が、様子がおかしいと感じてまどかに小声で話しかける。

「今、男の子が学校に……」
「男の子？」

まどかの言葉が気になって窓の外を見てみたいところだが、その場合立って移動しなければならない。しかし、授業中なので動きたくても動けない状態だ。
やがてキン、コン、カンとチャイムが鳴って、授業が終わり昼休み

が始まる合図がする。

「まどかさん、さやかさん、食堂でご一緒しませんか？」

まどかと、さやかと呼ばれた青い髪の少女の前に容姿端麗な緑色の髪の少女、志筑仁美（しずきひとみ）がきれいな包みに包まれた弁当を前面に差し出してきてニコニコと笑みを浮かべて言う。

「うん」

「さんせーっ！」

まどか控えめに答え、対になるようにさやかも賛同した。

食堂にはまどか達と同じように沢山の生徒や教師が集まってはそれぞれ持ち寄った弁当や食堂でさまざまな料理を頼んで昼食をとっている。

「うひゃあ、沢山集まってるねぃ」

さやかが手のひらの側面を額にくっつけて辺りを見渡した。さやかの視界には席はどこもかしこも埋まっている。

「あっ、二人ともあそこ」

まどかが指差した食堂の隅の場所には調度３つ分の空席があった。まどかたちはすぐにそこへ向かい、席の確保に成功した。そこでやっと３人は昼食ににありつくことができた。

「…でね。ラブレターでなく直に告白できるようでなきゃダメだって」
「相変わらずまどかのママはカッコいいなあ。美人だしバリキャリだし」
「そんな風にキッパリ割り切れたらいいんだけど…はぁ」
「うらやましい悩みだねえ」
「いいなぁ。私も一通ぐらいもらってみたいなぁ。ラブレター」
「ほーう？まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと。そこでまずはリボンからイメチェンですかな？」
にやりとさやかが怪しく笑ってまどかを見る。
「え？そ、そうじゃないよ～」
「アッハッハッハッ！じょーだんだよじょーだん！」
ぽんぽんとまどかの肩をたたいて、ひとしきり騒いださやかは水筒を手にとって中の麦茶を飲んだ。そこで何かを思い出しのかさやかは水筒を置いて再びまどかに話しかけた。
「そーいやさ、さっきまどかが言ってた男の子ってどんなのなの？」
「え？」
不意を突かれたまどかはキョトンとしたようにさやかを見る。
「だーかーらー、さっきの授業の終わりん時に男の子がどーだこーだって言ってたでしょ」
「あ、ごめんね。うん、さっきねこの学校に入ってくる子供を見つけたんだけど……」
「間違ってここに迷い込んじゃったのかしら…」

仁美は食事の手を止めた。さやかも深刻そうに腕を組んだ。

「うーん、なんにしろまどかの言ってることが本当ならあまり見過ごせないね。仁美の言ったようにこの学校に迷い込んじゃったなら、ちゃんとお家に帰してあげなきゃなァ」

ウンウンとさやか頷いて続けた。

「んで、その男の子ってのはまどか君が目撃した限りどんな感じだったのですかな？」

「えーっと……」とまどかは自分が見たあの子供の容姿を思い出すために記憶の糸を手繰りよせる。

「確か……身長はたぶん…私よりも低いんじゃないかな？」

「ウン」

「それに、赤いTシャツに、黄色い半ズボンを穿いていた…かな？それに坊主頭だったよ」

「ふんふん、なるほど。特徴さえ覚えりゃあとは探すだけだな！待ってなさいよーこの名探偵さやかちゃんがまどかの名に賭けて捕まえちゃうんだから！」

さやかの頭の中ではスーツを着た自分が片足を岩の上に乗っけながらコーンパイプを加えて指を前方にさして、背後で波が弾けている様子が展開される。まどかは「あはは」と笑うが、対して仁美はちょっと引きつった笑みを浮かべていた。

それを見たさやかも、ちょっと照れ笑いを浮かべた。

「あ……ちょっとアタシ調子に乗りすぎちゃったかな……」

「ち…違いますの…あれ…」

仁美が指をちょっと震わせながらさやかを――実際には、さやかの背後を指差した。

「？」

「ん？」

さやかの背後には――まどかの目撃情報どおり、赤いＴシャツに、黄色い半ズボンを穿いている坊主頭の少年――野原しんのすけがガラスに顔をくっつけながらこちらを見ていた。

「きゃあああっ？！」

「うおおおおおっ？！」

まどかとさやかが驚いてその場を離れる。しんのすけも「やば」と声を漏らすと、すぐにその場から走り出す。

その光景を見て我に返ったさやかはまどかの手を掴んで一緒に走り出す。

「え？ちょ、さやかちゃん？！」

「追わなきゃ――！仁美ーアタシたちの弁当頼んだぞー！！」

そう言って、呆気にとられているまどかとともに食堂を出て行ってしんのすけを追った。一方、置いてけぼりにされた仁美は目を点にしてその一連の行動を見ているしかなかった。

しんのすけは小さく身軽な体を駆使しながら生徒の股の下や障害物をくぐって逃げ、一方まどか達は通り行く生徒達をかき分けながら、しんのすけを追う。

（うっ、オラがかわいいからあのおねいさんたち追いかけてくる…）

そして校舎の中に入っていき、まどかたちも一瞬ためらいがちに校舎の入り口の前で踏みとどまるが、すぐに校舎の中へと入っていった。

校舎を行き交う生徒達は走り行くしんのすけと、まどかたちをを見て「なんだなんだ？」と騒ぎ、その光景をみやる。

やがてしんのすけは階段を上っていき、そこでさやかはしめた、と笑みを浮かべると一旦立ち止まった。

「ハァ……ハァ…どうしたの？さやかちゃん…」

すっかり追う気になっているまどかは息切れしながらさやかを見た。

「まどか、階段を見張ってろ。アタシがあの子を3階まで誘導してくるよ」

「…わかった、気をつけてね」

「おう！」

にっとさやかは笑みを浮かべると、まどかをその場において階段を駆け上っていった。

「待て～ガキンチョ～！」

人通りの少ない3階にて、すっかり銭形警部になりきっているさやかはいまにも手錠を振りかざしそうな勢いで追いかけてくる。

「そうは問屋が大根をおろさないぜとっつあ～ん」

しんのすけも逃げながらさやかの言葉にノリノリで答える。

ふと、しんのすけは背後をみると、追いかけていたさやかの姿が無い。あれ？としんのすけは一旦足を止めると、

「みーっけた！」

「おわっ？！」

前方の角からさやかが現れて、両手を広げながらしんのすけに詰め寄ってくる。しんのすけはすぐに来た道を戻って走っていく。その光景をさやかはニヤリと先ほどのように悪い笑みを浮かべると、わざと速度を落としながら走り出した。

（へっへー、その先にはまどかが待ってるのさっ！）

この校舎のこの3階のフロアはドーナツ状のフロアになっているのである。階段は2階への階段と、その隣に屋上への階段があるのだ。その二つの階段の前にはまどかが見張っている。つまりさやかの頭の中ではしんのすけを袋小路に追い詰めた、ということである。

「！」

さやかの作戦通り、階段の前にまどかが立っていた。しかし、しんのすけは止まらずまどかに向かって走ってくる。

「まどか！捕まえて！」

「う、うん！」

勇気をだしてまどかはしんのすけに近づき両手で捕まえようとした瞬間、しんのすけはしゅたっ！と跳躍して2階への階段への手すりへと飛び乗った。まどかの両手が空を切る。

「ふぇっ？！だぶっ！」

まどかは勢い余って転んでしまい、床に顎を強く打ってしまった。しんのすけはそのままスノーボーダーのような体勢で手すりを滑ってくだっていく。

「うっそ～！すげぇ…」

思わずさやかはしんのすけの運動神経に感心するが、すぐにまどかに駆け寄った。

「イタタ……」

「まどか、大丈夫？」

あごをさすりながらまどかが立ち上がる。そして「大丈夫」と言わんばかりに笑みを浮かべる。

「平気。それよりすごいね、今の…」

「うん…最近の子供ってすごいんだなーってそんなこと言ってるバヤイじゃないって！」

二人はそのまま階段を下りて、しんのすけを再び追い始めた。

その頃、しんのすけは二階の廊下を走っていた。

もうそろそろだいじょぶかなと足を止めて振り向こうとしたとき、下になにか落ちていることに気付いた。

「お？なんだ、これ」

しんのすけが見つけたのは黄色い宝石がはめ込まれている指輪だった。拾ってみると、０歳児にして宝石好きなひまわりに見せたらうっとりするような神秘的な輝きを放っている。

「あ、拾ってくれたの？」

前方からおっとりしたような女性の声が聞こえる。しんのすけそちらを向くと、口元に微笑を称えた金髪の縦ロールの美少女がこちらにやってくる。そのグラマラスな体型に、一瞬でしんのすけは釘付けになった。

「ありがとう。これ、私の大切なものなの」

そっとしんのすけの手から指輪を取って、自分の中指にはめる。美少女を人目見たしんのすけは照れ笑いを浮かべながら、

「いやぁそれほどでも～。ねぇねぇおねいさん、オラと一緒にこれから三輪車でツルーリングしない？」

「え？うーん、どうしようかしら…」

しんのすけのいつものナンパに美少女は「うふふ」と冗談めかしに笑っていると、美少女の前方からまどか達がこちらに向かって走ってくる。

「あっ、さやかちゃん。あの人…！」

「しめた！マミさん！その子を捕まえて！」

しんのすけとマミと呼ばれた美少女の存在に気付いたさやかはしんのすけに指を差した。マミは軽く頷くと素早くしんのすけの胴を掴んで持ち上げた。

「捕まえたわよ」
「捕まっちゃった～」
しんのすけは捕まったにも関わらずいまだに「えへへ～」と照れ笑いを浮かべている。
「ふぁぁ…やっと捕まえた…」
「疲れた……」
走りつかれたまどかとさやかは、その場で崩れるようにしなしなとへたりこんでしまった。
まどか達に捕まったしんのすけは、そのまま3人に人目のつかない屋上へと連行させられ、3人に囲まれて尋問を受けることになった。
「君、どこから来たの？」
しんのすけを床に座らせるような形で、その周りをまどか達が囲んでいる状態だ。最初にまどかが尋ねる。
「オラ？春日部からだゾ！」
「あの…そうだけども……」
「大丈夫よ、まどか。ここは私に任せて。ねぇ、君は幼稚園とかはどうしたの？どうしてここに来ちゃったのかしら？」
返答に困ったまどかの代わりに、マミが腰を屈んでしんのすけと目線を合わせながら質問をする。
「いや～オラ、おねいさんに会いたくて…」

「嘘つけぃ！！」

しんのすけの反応にさやかはビシッと突っ込みをいれる。一方、「アハハ…」と苦笑いを浮かべているマミは「これは一筋縄ではいかなそうね……」と心の中で密かに呟いた。

「あ、そうだ。オラ、ほむらちゃんに会いに来たんだっけ」

「ほむらちゃん？」

マミの美貌に夢中になっていたしんのすけは途端に我に返って目的を思い出した。その「ほむらちゃん」という言葉をまどか達が聞いた瞬間、ぴくりと反応した。

「えっと…アンタ、なんであの転校せ……ほむらに？」

「おしりあい？」

「うん、ほむらちゃんは私たちのクラスメートなの」

「おおっ、これはゴクウだぞ！」

「ゴクウじゃなくて、奇遇（キグウ）じゃないかしら？」

「そうとも言う～」

マミに訂正されてのんびり答えるしんのすけとため息をつくまどか達。完全にまどかたちはペースをしんのすけに持っていかれているようだ。

気を取り直して、再びまどかが尋ねる。

「でも、ほむらちゃんにどんな用で来たの？」

「なんでキュウリ君をいじめるのか聞きに来たんだゾ」

「キュウリ君？！！」

まどか達3人は声を揃えてしんのすけの意味不明な単語を叫んだ。

そして3人は首を傾げながらその『キュウリ君』なるものについて話し合う。

「キュウリ君って…まさかあのキュウリ（野菜）のことか？」

「違うと思うよ……たぶん」

そう言っているが、まどかの頭の中ではキュウリを罵倒し、へし折ったり、そのままマヨネーズをつけてムシャムシャ食べるほむらを想像してはちょっと吹き出してしまった。

一方のマミは、冷静にキュウリとほむらという2つのワードを考えてキュウリの正体を考察する。

（たぶんこの子はさっきみたいにキュウリをなにかと言い間違えてるに違いないわね……ほむらに…キュウリ…キュウ……！）

答えに辿り着いたマミははっとしたように表を上げて、ついしんのすけに尋ねた。

「君、もしかしてキュウリじゃなくて『キュゥべえ』じゃないかしら？」

「おー、そうそうそうだゾ！」

思い出したようにしんのすけはマミを指差した。

「キュゥべえ…それって！？」

「なんでこの子が…？」

驚いてまどかとさやかはしんのすけをみやる。マミもなにか思い出したようでしんのすけを見た。

「そう、やっとわかったわ。君なのね？キュゥべえを助けた男の子って」
「キュゥべえ君のこと、知ってるの？」
「ええ、キュゥべえは私たちの友達ですもの。ありがとう、大切な友達を助けてくれて」
そういってマミはやさしくしんのすけの坊主頭を撫でる。
「えへ～それほどでも～」
「鹿目（かなめ）さん、美樹（みき）さん。暁美さんは確か貴方達のクラスメートよね？」
「あ、はい」
「でもマミさん。アイツ、先週からずっと休んでますよ。やっぱり魔女の…」
「えーっ？ざんねんだゾ…」
落胆するしんのすけを尻目にさやかの言葉を聞いて「そうねえ……」と考えるようにマミは人差し指を唇の下に当てた。
「それじゃあ君、名前は？」
「ホイ！オラ、野原しんのすけです！」
「しんのすけ君…ネ。わかったわ、それじゃあこの学校が3時になって終わったら、私の家に是非いらっしゃい。キュゥべえも待ってるわ」
「いいの？」
「ええ」とマミは微笑んで頷いた。そしてマミはまどかとさやかの方を向いて、
「あなたたちも是非来てくれないかしら？キュゥべえにこの子が選

ばれた以上、あなたたちにとっても他人事じゃないものね」
「はい！」
「ア、アタシも喜んで！」
そろそろ時間だから私は教室に戻るわね、と立ち上がって、マミは屋上から校舎へ向かって自分の教室に戻っていった。
まどかとさやかも立ち上がって、しんのすけの方を向いた。

「それじゃ、アタシ達も戻りましょっか」
「うん。あの、しんのすけ君…だっけ」
「ほい」

まどかが屈んで、しんのすけと目を合わせる。

「私たち、授業が終わったらすぐにここに迎えに来るから、それまで待っててくれないかな」
「いいよ」

二つ返事で返されていささか心配は残るものの、とりあえずは待っててくれることをしんのすけと約束して、まどか達も自分達の校舎へと戻っていった。
しんのすけはその場で寝転がると、青空を仰いでふと呟いた。

「ほむらちゃん……」

【つづく】

2．奇跡も、魔法も、あるんだゾ（後書き）

【次回予告】

まどか、さやか、マミと出会ったしんのすけはマミの家でキュゥべえと再会し、3人が魔法少女であることに驚く。
そしてしんのすけからキュゥべえや魔法少女のことを聞いたひろしとみさえは色々曲解しながらも、その翌日、マミの家へ向かった。
しかし、再び魔女の結界に迷い込んでしまい、そこでまどか達と再会し、無事に結界から出るまで行動を供にする。
だが、その8人に、死の影が訪れてくることにこの時まだ誰も知らなかった――。

小説　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ六人の魔法少女たち　ぱーとすりー　お楽しみに！！

3．もう何も恐くないゾ（前書き）

前回のあらすじ

こんにちは、鹿目まどかです。
前回、ほむらちゃんに助けられたしんのすけ君は、その夜すき焼きをするために明日サトーココノカドーでその食材を買うことになったの。いいなぁ、私もすき焼き食べたいなぁ…。
そこでキュゥべえも野原さんたちと一緒についていってお菓子売り場でしんのすけ君とお菓子を選んでいると偶然、ほむらちゃんと出会ったの。

不思議な力を使いながらキュゥべえを捕まえたほむらちゃんをしんのすけ君は追うんだけれど、そこでほむらちゃんはしんのすけ君に「もう二度と、私とこいつに関わらないことね。今までのように、平和な生活を送りたければ――」って言って去ってしまったの。…ほむらちゃん、一体どうしちゃったんだろう。

そしてしんのすけ君はどうしてキュゥべえをいじめるのかほむらちゃんに尋ねるために、カスカベ防衛隊の助けもあって私たちの学校に来て、いろいろ追いかけっこがあって、私たちやマミさんと出会ったの。これであってるよね？さやかちゃん。

3．もう何も恐くないゾ

まどか達と出会ったしんのすけは、授業が終わるまでわざわざ屋上で待っていた。まどかの言っていた通り、ちゃんと授業を終えた後に、しんのすけを迎えに行って校門で待っているマミと合流した。マミの家に向かう途中、何かを思い出したように「あっ」とさやかが声を漏らした。

「そういや、まだアタシ達の自己紹介がまだだったね。アタシは美樹（み き）さやかよ。春日部中に通っている2年生だよん」

「鹿目（かなめ）まどかよ。私もさやかちゃんと同じクラスメートなの。よろしくね」

「私は巴（ともえ）マミ。鹿目さんと美樹さんと同じ春日部中の3年生よ」

遅れた自己紹介を受けてほうほうとしんのすけは頷く。

「まどかちゃんにさやかちゃん、それにマミおねいさん。覚えたゾ！」

「なんでマミさんだけ「お姉さん」扱いなんだよ？アタシもお姉さん扱いしろぃ」

「あはは、私は別にかまわないよ」

さやかが自分とまどかに「お姉さん」扱いでないことに唇を尖らせ、対してまどかは微笑を浮かべて自分に対する扱いを快く受け止める。

「しんのすけ君、貴方はどこの幼稚園に通っているのかしら？」

「ふたば幼稚園だゾ！」

「おっ、アタシとまどかと一緒じゃん！あのおっかない顔の園長先

生は元気？」
「組長先生ならお元気だゾ」
組長先生、と聞いてまどかとさやかは同時に吹き出してしまった。
「あははは っ…く、組長先生…ふふっ！あ、あの先生らしい…呼ばれ方だなっ…ひひっ！」
「さ、さやかちゃんっ…ふふっ…だ、駄目だよそんなふうに…言っちゃ…」
「ツボに入っちゃったね」
「よくそんな言葉知っているのね」
もしここに組長…いやいや園長先生がいたなら「組長じゃなくて園長です！」と必死に弁解するだろう。そしてマミは腰を折って笑っている2人を見て、「今頃その組…園長先生なる人はクシャミでもしているのかしらね」と心の中で呟いていた。
しばらくしんのすけとまどか達は雑談をしつつ歩いていると、遠くにしんのすけも見覚えのある建物が見えてきた。あれは――。
「私はあのマングースマンションに住んでいるのよ」
そう言ってマミはマングースマンションを指差した。
「おおっ！マングースマンション！風間君ちだ！」
「風間君？しんのすけ君の友達かしら？まあいいわ、こっちよ」
そして四人はマングースマンションに入っていき、エレベーターを使って6階まで上がっていくと真正面の部屋に目的の部屋があった。マミが玄関のドアを開けてくれた。

「独り暮らしだから遠慮しないで。ろくにおもてなしの準備もないんだけど」
「おかまいなくー」

マミの部屋はさほど広くは無いが、日の当たる明るい雰囲気の部屋だった。きれいに片付けられており、リビングにおいてある家具もなかなか高そうなものばかりだ。
マミが先頭を歩いて、リビングの中心にある小さな円テーブルの周りにしんのすけとまどか、さやかの3人を座らせると「ちょっと待っててね」と3人を置いて部屋の奥へと行った。
しばらくしてマミが5つのケーキと3つ紅茶の入ったカップ、そしてしんのすけの為に用意してくれたのか一つだけオレンジジュースが入った透明なコップが置いてあるお盆を持ってきてくれた。それをテーブルに置いた。

「どうぞ食べて、しんのすけ君はこっちのほうがいいでしょう？」
「おお、マミおねいさんふとももも！」
「ふとももじゃなくて太っ腹でしょ？」

まどかが間違いを訂正すると、しんのすけが「そうともいう」とお決まりの言葉を返して早速フォークをケーキのてっぺんにあるイチゴに突き刺して口へ運んだ。まどか達もそれぞれケーキを口にする。
「お？」としんのすけはケーキを食べながら、あることに気付いた。お盆の上にはまだケーキが一つ余っている。一体誰のだろう。

「マミおねいさん、ケーキがも一つあまってるけど、これって誰の？」
「僕の分じゃないかな」

しんのすけの真下でマミの代わりに、聞き覚えのある声が答えた。
「おわっ、びっくりした！」
もぞもぞと、テーブルの下からキュゥべえが這い出てきて、しんのすけの隣に座った。
「やぁ、しんちゃん！」
「キュウリくーん！」
しんのすけは感極まってキュゥべえに抱きつき、特徴的なしもぶくれの顔でキュゥべえを頬擦りした。キュゥべえもまんざらではなく、ほお擦りされながらも再会を喜んでいるようだ。
「ホントに見えているみたいだね」
「つか、前の話じゃ直ってたのにまたキュウリに戻ってるし……」
まどかとさやかはしんのすけがキュゥべえを視認できることに驚いた。
しばらく経って頃合かな、と感じたマミは「しんのすけ君」とし
のすけを呼んだ。
「ほい」
キュウべえに抱きつきながら、顔だけをマミに向けた。
「改めて紹介させてもらうわね。私は巴マミ、そして――」
キュゥべえと契約した、魔法少女よ。とマミは言って続けた。

「鹿目さんも美樹さんも、私と同じ魔法少女よ。まだまだ新米だけれどね」
「まどかちゃんもさやかちゃんも？」
「イェーイ」

しんのすけが驚いてまどかとさやかの方を向くと、得意気にさやかがピースをした。

「しんのすけ君、君はキュゥべえからどの位、魔法少女について聞かれたのかしら？」
「えーと……たしかキュウリ君と契約した魔法少女が魔女になって、それを魔法少女がやっつけて……」
「あらら、こんがらがっちゃってるわね…。落ち着いて、しんのすけ君。一からちゃんと説明してあげるからね。鹿目さんたちも復習のつもりで聞いて欲しいわ」
「あ、ハイ」

さて、とマミは軽くセキをして説明を始めた。まるで先生みたいだ。キュゥべえも先生役をやるようにマミの隣へ移動する。なら、しんのすけとまどか、さやかは生徒である。今日の授業は魔法少女に関する授業だ。

「まず、魔法少女っていうのはキュゥべえに選ばれて、契約によってソウルジェムを得て魔女という怪物と戦う使命を帯びた女の子のことよ」
「ソウルジェムってこうえんにある…」
「それはジャングルジム。この石を手にしたものは、魔女と戦う使命を課されるんだ」

キュゥべえがしんのすけの言い間違いを訂正しながら、ちょいちょ

いとさっきしんのすけが拾ってくれた黄色い宝石がくっついたマミの指輪を指差した。

「そう、魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」

「そして魔女というのは、呪いから産まれた存在なんだ。願いから産まれる魔法少女とは対をなす存在だよ」

魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を蒔き散らすとキュゥべえが言って、マミに説明を交代した。

「そうね。しんのすけ君、最近、この春日部で理由が分からない自殺や殺人事件が多く起きていることは知っているかしら」

「うん。トシデンテツ大会でボーちゃんが『怪物が原因だ』って言ってたゾ」

「その通りよ。理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ」

形のない悪意となって、人間を内側から蝕んでいき、それが殺人や自殺へと発展していくという。そういうと、ボーちゃんの言っていた都市伝説は本当ということになる。一体どこでそんな都市伝説を聞いたのだろうか。

再び、マミからキュゥべえへと説明が交代する。

「しかもその姿は、普通の人間には見えないからタチが悪いんだ。魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないから」

しんのすけがこの間迷い込んだ迷路のような場所が、恐らく結界だろう。そしてそこから生き延びてこれた人間は、めったにいないという。

「だからこの間、しんちゃんが結界に迷ったって言ってたけど、本当ならあのまま使い魔や魔女に殺されてたと思うよ。そこで魔法少女と出会うなんて、すごい強運の持ち主だね」
「いや～オラ、あくうんがつよいってよくほめられますから」
それは誉められたとは言わないけど…とまどかは苦笑しながら尋ねる。

「その出会った魔法少女っていうのがほむらちゃんなの？」
「そうだよ」
「へぇ～あいつでも人助けするほどの優しさはあるってことね」
さやかが嫌味ったらしくほむらの悪口を言って、まどかに「さやかちゃん」と咎められた。

「しんのすけ、あいつにはあまり構わないほうがいいよ。あいつ、グリーフシードのためならなんだってする奴だからさ」
「グリーンチンコ？」
「グリーフシードね。倒した魔女が落とす、いわば見返りみたいなものよ」
しんのすけのとんでもない言い間違いを冷静に受け流して、マミが説明した。

「ほむらは新しい魔法少女が産まれることを、阻止しようとしてたんだろうね」
「キュゥべえ、なんでそんな奴を契約させたのさ」
さやかの問いにわからない、とキュゥべえはかぶりを振った。

「彼女は僕が契約したとも言えるし、してないとも言える。極めつけのイレギュラーだ」
「なんだそりゃ」
さやかは小首を傾げるが、ともかくとマミが言った。
「あの子だって人前で襲うような真似はしないはずよ。とはいえ、美樹さんが言ったように余り関わらないほうがいいわ」
「気にすんなしんのすけ。アイツが何かちょっかい出してきたら、私がぶっ飛ばしてやるからさ。マミさんだってついてるんだし」
「そうよ。美樹さんはともかくとして、私が付いているんだから大丈夫。安心して」
「ともかくって…マミさんひでぇっスよ…」
「ほーい……」
「……」
しんのすけとまどかは同じようなタイミングでちょっぴり悲しげな表情を浮かべた。しんのすけがまどかと同じ表情をしていることに気づいて、まどかちゃんもオラと同じほむらちゃんは悪いやつじゃないと思っているのかな？とふと考えた。
話題が少しそれてしまったが、そこでさやかが聞こうとしていた事を思い出してしんのすけに質問をした。
「そういやさ、なんでしんのすけにはキュゥべえが見えるの？魔法少女と候補者しか見えないんじゃなかったっけ？」
「それは僕が説明するよ」とキュゥべえがケーキを食べる手を止めて説明をした。

「さやかの言うとおり僕は僕自身が選んだ少女にしか姿を現さないようにしている。だけどしんちゃんは特例として姿を見せてあげているんだ」
「どうして？」
すると、うーん…とキュゥべえが器用に腕を組んで悩むそぶりを見せた。
「別に話してもいいんだけれども…。しんちゃん、ちょっといいかい？」
「なーに？」
キュゥべえはさっきまで部屋にいる全員にテレパシーを送っていたが、テレパシーを送る対象をしんのすけのみに変更した。キュゥべえはこうやって基本的にテレパシーで会話をしており、他にも特定の範囲内ならキュゥべえを中継して複数の人間がテレパシーで会話をすることも出来るのだ。
「ひまわりちゃんのことなんだけれども、まどか達には秘密にしてくれないかな？」
「なんで？」
「だってさ…ホラ、まどか達にしばらく隠しておいて、ピンチのときにヒーローみたいに魔法少女になったひまわりちゃんが現れたらカッコいいだろう？」
キュゥべえの言葉を聞いて、しんのすけは頭の中で、そうなった時のシチュエーションを想像する。
まどか達がほむらが倒したようなあの魔女によって拘束される。そこへ颯爽と魔法少女となったひまわりが現れて重火器を駆使して魔女を倒す。そこへ自分も現れてひまわりの兄ですと名乗り、まどか

達から尊敬の眼差しを向けられる――。

「……」

「？？？？」

しんのすけは再び現実と妄想の区別がつかなくなり、赤面をしながらよだれを垂らしてしまう。まどか達はその光景を見て、クエスチョンマークを浮かべた。一体キュゥべえは何を言ったのだろう。

「わかったかい？しんちゃん」

「はーい」

赤面しながら快くしんのすけが応じたところを確認して、キュゥべえは再びテレパシーを全員に送る。

「やあ、お待たせ」

あえて誰もキュゥべえに問いかけることなく、何故しんのすけがキュゥべえを視認出来るのかを聞く。

「さて、何故魔法少女になれる資格がないしんちゃんに僕が姿を見せているのか。それはしんちゃんの知り合いにこれまでない素質を持った候補を見つけたからだよ」

だけど、ある理由でしゃべれなくなっているんだ。とキュゥべえは続けた。

「その子は魔法少女になる意志は表明している。そこで、いつもその子にコミュニケーションを取っているしんちゃんに白羽の矢を立てたんだ」

そしてしんのすけの家に尋ねるところでほむらに襲われ、怪我をしたところでしんのすけが見つけて家で介抱され、その子とコミュニケーションを取りつつしんのすけと供に生活していた。その後、再びほむらに捕まってしまうが、なんとか逃げてマミのところへ転がり込んだと、自分の経緯を話した。

「へぇ～キュゥべえが推す程の素質を持った魔法少女ねぇ」
「是非会ってみたいものね」
「なんかの病気にかかっているのかな」

3人ともその魔法少女候補に興味深々のようだ。しんのすけはついうっかりとしゃべろうとしたが、キュゥべえがにらんできたのでなんとか踏みとどまれた。

「しんのすけ君、その子は歩ける状態なのかしら？」
「ううん」

嘘はついていない。ひまわりはまだハイハイしている状態なのだから。

「可哀想に…。いい提案があったのに」
「ていあんって？」

魔法少女無料体験コースよ、とマミが言った。なんだか無料という単語に弱いみさえが食いついてきそうだ。

「なにそれ」
「文字通り私が魔法少女はどんなふうに戦うのか、見せるものよ。実際に見てもらったほうが魔法少女がどれだけ大変なのかもわかる

でしょう？」
「ほうほう」
たしかに、よく幼稚園のよしなが先生が言っていたように、じっさいに見たほうがわかるわよ、と言っていたことがある。
だけれど、足が不自由なら危険ねと独り言のようにマミは呟いた。
「じゃあオラが行くよ。んで、そのあとにこのことを話しておけばいいでしょ？」
「しんのすけ君、そればダメよ。危険すぎるよ！」
しゃむに言うまどかに「どおどお」と両手をあげてしんのすけはなだめる。5歳児のくせにちょっと大人びた行動のギャップに、マミはおかしくって口元をゆるめた。
「オラだって強いもん。剣道でだって筋子があるって言われたことがあるゾ」
「そうじゃなくって……」
まあまあ、と今度はさやかまでまどかをなだめ始めた。
「しんのすけはアタシ達で守りゃいいさ。それに、アタシ達がカッコいいところを見せてやればしんのすけだってそれをその子に伝えて、魔法少女になる決意を固められるだろ？」
「でも……」
やはりまどかとしては納得がいかないらしい。5歳の幼い少年を危険な場所へ連れて行くことに抵抗を感じているようだ。
「そうね、ここはしんのすけ君の友達想いな所に免じて代わりにし

んのすけ君が魔法少女無料体験コースを受けることにしましょう」
マミは紅茶を飲み干して、コースターの上にカップを置いて、不安そうなまどかに笑いかけた。
「大丈夫よ、鹿目さん。しんのすけ君は私が守りきってみせるわ、不安に思うことはなにもないわよ」
「オラ、守られちゃいます」
「威張っていうなよ」
まどかは一度マミを見て、次にしんのすけを見た。まどかに見られたしんのすけは「おいおい、そんなに見つめないでくれよ」と頬を赤く染めて、再びさやかに突っ込まれた。
「…わかったわ」
「決まりね」
マミは元気よく立ち上がった。
「じゃあ早速……と言いたいところだけれどしんのすけ君、時間は平気かしら？」
窓の外を覗くと、空はオレンジ色に染まって太陽は西に沈みかけていた。時計は４時半を指している。
「おおっ！オラもう帰らなきゃ母ちゃんに怒られちゃう！」
「それじゃ、明日にしましょう。明日の４時にこのマンションのエントランス前で待っててね」
「ほーい」

しんのすけ達はマンションを出て、先にまどかとさやかがしんのすけを家に送ることにした。キュゥべえはマミの家に留まって、ほむらから身を隠すと言ってついてくる事は無かった。
マンションのエントランス前までマミとキュゥべえが来て、しんのすけ達が視界からいなくなるまで見送ってくれた。たまに振り返って手を振ると、向こうも手を振り返してくれた。

「しんのすけ君、家はどこなの？」
「こっちこっち」

しんのすけが先頭を歩いて、３人は野原家へと向かう。
途中、他所の人の敷地内や路地を外れた場所を歩いて、まどかとさやかは戸惑いながら歩くが、しんのすけは憮然とした表情で進んでいく。

「し、しんのすけ君。いつもこんなところを通ってるの？」
「そうだよ」

下が他所の家の庭になっている塀の上をまどかとさやかは猫のように四つん這いになって進んでいき、しんのすけは普通に歩いている。

「アタシたちがこういうところ歩いた記憶なんて小学生以来なんだけど。つーか、よく見つからないね」
「お、もうすぐだゾ」

塀の途切れたところを三人は降りて、左に曲がるとすぐ近くに二階建ての赤い屋根の家が見えた。しんのすけの家である。

「あれがオラんちだゾ」

玄関の前で、しんのすけとまどか達は別れることになった。

「バイバイ、しんのすけ君」

「じゃ、また明日な！楽しみにしてるよ～」

「そゆことで～」

手を振ってまどか達を見送ると、背後から聞き覚えのある声がしんのすけの名を呼んだ。

振り向くと、買い物袋を下げたみさえと背中におんぶひもでおぶられているひまわりがしんのすけを見下ろしていた。

「おおっ、母ちゃん。お帰りすの尻尾は邪魔くさ～い」

「ただいまぐろのおさしみ……って、今いた女の子たちは誰なの？」

どうやら遠くからみさえがしんのすけとまどか達が玄関で別れるところが見えたようだ。それで珍しく年上の女の子と親しげに話しているのを見て興味を持ったらしい。

「まどかちゃんにさやかちゃんだゾ」

「へぇ、ななこちゃん以外に友達が出来るなんて珍しいじゃない」

「ななこおねいさんは友達じゃないゾ！オラのコイビトだもん！」

「はいはい。とりあえずこれ持って」

ムキになるしんのすけを軽く受け流してみさえはしんのすけに買い物袋を１つ持たせると、玄関のドアを開けて家の中へと入った。みさえはあらかた買い物袋の中身を冷蔵庫や棚の中へと収めると、おやつのチョコビを渡された。今日はマミのケーキに加えてチョコビまで食べれるとは。しんのすけの心の中では「５年間生きててよかったあ」と満足な状態でチョコビを頬張っていた。

「しんちゃん、今日はパパは遅く帰ってくるから、明日すき焼きにしましょうね」
「ほーい」

今、幸福感にひたっているしんのすけにとっては、すき焼きの延長は些細な事のように感じている。

「たい」

しんのすけがチョコビを食べている横でひまわりがやってきた。「よっ」としんのすけが右手を上げて挨拶をすると、「や」とひまわりも真似して挨拶を返す。

「ひま、キュウリ君見つかったゾ。マミおねいさんのところにいるんだって」
「ほーほー」
「明日、魔法少女のお仕事が見れるんだって。ひまも一緒に行く？」
「たい！」

行きたい、と言うふうにひまわりは頷いた。明日、散歩に連れていくとみさえに嘘をつけばいいだろう。

その夜、ひろしがいない食卓で、しんのすけとみさえ、ひまわりは晩御飯を食べる。晩御飯の内容は普通のご飯に鳥の唐揚げやサラダ（ひまわりは離乳食）といったものである。このあいだのようなえらく貧相な内容ではない。
しばらく沈黙を守って黙々と食べていると、みさえがしんのすけに話しかけることで、その沈黙は破られた。

「しんちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけれど」
「なに？三段腹がとうとう四段腹になっちゃったからやせる方法を教えて欲しいとか？」
「そおなのよ～どうやったら楽して痩せれるのか――って失礼ね！三段腹じゃないわよ！そうじゃなくて、最近、また私に隠している事があるでしょ？」
「オラもう何も隠してないゾ！」
「『もう』ってなによ！今まで私に隠していたわけ？」

しまった、としんのすけはハッとした表情になった。それを見て、みさえはやれやれとため息をついた。

「あのね、しんちゃん。ママちょっと不安なのよ。あんた最近独り言が多いんだもん。またあの時のように大変な事になるんじゃないか、って。正直に言いなさい、怒らないから」
「怒らないからとか言っていつも怒るクセに……」
「なにか？」

しんのすけの呟いた言葉に、みさえはギロリと睨み付けて低い声で半ば脅すように言った。

「い、いえ、なにも……」

しんのすけは首をすくめてほぼ強制的にキュゥべえを介抱したこと、キュゥべえはしんのすけとひまわりにしか見えない事、サトーココノカドーでお菓子を選んでいるときにほむらと再会し、そのままキュゥべえを連れていってしまった事、そして何故キュゥべえをいじめるのか確かめるために春日部中学校へ乗り込んで、そこでまどか達と出会って魔法少女のノウハウを教えてもらった事――とにかく

最近の事を洗いざらいみさえに話した。はたから見れば刑事が容疑者を取り調べをしているように見える。
ひと呼吸置いて、みさえは口を開いた。

「なるほどねぇ…」

食事する手を止めて、再びしんのすけをにらむ。しかし、それは先程のように脅すような感じではなく、どこか訝しげな雰囲気を漂わせている。しんのすけは石のように硬直してポトリと箸に挟んでいたご飯粒をテーブルの上に落としてしまう。

「怪我をした動物を治そうとしたコトは偉いわ。しんちゃんが生き物を大事にする優しい子でママは鼻が高いわ」

だけど、とみさえはいつものような暴力的な感じではなく、腕を組んで毅然と叱る様に表情を歪ませて続けた。

「その生き物をママに黙って家に置いていたことと、授業中の学校に勝手に入っていったことはいけないわね」
「だからオラ、こないだ言ったじゃん。「見えないの？」って」
「知らないわよ、あんたがそのキュウリって動物を別の場所に隠してそうやってママに嘘ついたんでしょ？」
「はぁ？」

どうやらみさえはキュゥべえがしんのすけとひまわり以外には見えないことを信じていないようだ。それどころかそれはしんのすけがついた嘘と思っているらしい。

「ま、ちゃんと正直に言ったからゲンコツやグリグリ攻撃は無しにしてあげる。そのかわり、明日そのまどかちゃんやマミちゃんって

子に迷惑をかけたことを謝りに行かないとね」
「えーっ？！」
明日はまどか達と一緒に魔法少女はどういうものか見せてくれるのに、そこへみさえが来たらきっと色々な意味で大変なことになりかねない。それにしんのすけにとってもひまわりに魔法少女がどういうものか知る事とマミに近づける事絶好のチャンスと踏んでいた。
それすら台無しにされるかもしれない。
「えーじゃないわよ。当然でしょ？ホントなら中学校まで行って謝らなきゃいけないんだから。さ、早く食べて風呂に入っちゃいなさい。あとがつっかえてんだから」
「……ほーい」
落胆してしんのすけはため息をつきながら食事を進める手を再開させた。
――その翌日。午後3時半。
もうそろそろマミたちと落ち合う時間が近づいてきた。しんのすけは昨日まどか達と魔法少女体験についての約束も白状してしまったため（みさえ本人は魔法少女ごっこと思っている）、3時めがけてマングースマンションに行くことになったのだ。
「あれ？みさえ、しんのすけと一緒にどこかに出かけるのか？」
今日は有給をとっていて家にいるひろしが新聞を読む手を止めて、外出する準備をするしんのすけとみさえを不思議そうにみやった。
「実はね、かくかくしかじか…」

みさえは昨日聞いたしんのすけの話（自分なりに解釈して）を、しんのすけに聞こえないようにこっそりとひろしに話した。

「なるほどなぁ。ま、自業自得だな」

「はぁ～あ…本当は今日デパートであれの特売日だったのに……」

ぶつぶつとグチをこぼすみさえを見て、ため息をひとつついて、やれやれとひろしは微笑んだ。

「みさえ、俺が謝りにいってやるからデパートに行ってきたらどうだ？」

「え？」

驚いたように反応して、みさえはグチをこぼすのをやめてひろしの方を向いた。

「いいの？」

「ああ、いつもお前、家事やしんのすけの事で苦労してんじゃねぇか。たまには羽を伸ばしたらどうだ？」

「あなた……」

頬を赤く染めて、みさえとひろしはお互いに向き合ってそっとやさしく抱きしめあう。夫婦愛あふれる微笑ましい光景であるが、しんのすけやひまわりはいつもみさえがひろしを尻に敷く光景とは真逆の光景を見てドン引きしていた。

その頃――春日部病院前にて。

「――ここね」

マミは背後にまどかを控えさせながら、ソウルジェムを建物の壁に向けてかざした。
キラリとソウルジェムが輝いたと同時に壁のかざした部分も輝き、魔法陣のようなものが出現した。

（キュゥべえ、状況は？）

テレパシーを使って、マミとまどかはキュゥべえとコンタクトをとる。

（まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ）
（さやかちゃん、大丈夫？）
（へーきへーき、退屈で居眠りしちゃいそう）
（むしろ迂闊に大きな魔力を使って卵を刺激する方がマズい。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい？）
（わかったわ）

そこで一旦マミとまどかはテレパシーを切ると、魔法陣へ向かって歩き、そのまま魔法陣の内側へと入っていった。二人が入っていくと同時に、魔法陣は消えてしまった。
魔法陣の内側には洞窟のような空間が広がっており、あちらこちらに巨大化したお菓子やビンが散らばっている。マミとまどかはその中を手を繋ぎながら歩いていく。

実は先刻、まどかとさやかとキュゥべえが学校からの帰宅途中、通った春日部病院にて孵化しかけているグリーフシードを見つけたのだ。
マミはあのとき、しんのすけに説明するのを忘れていたが、グリーフシードとは魔女の卵のようなものである。そこに絶望など、マイ

ナスの思念が溜まると魔女となって再び孵化するのである。（といっても、魔女を倒して入手するときは魔法少女にとってはマミが言っていたように「見返り」に違わぬ有益なアイテムなのである。その理由は後に説明したいと思う。）
それを見つけたまどか達は、キュゥべえの指示でまどかがマミを呼びに行き、さやかとキュゥべえはその場に残って結界の中に入ること覚悟で孵化するグリーフシードを見張ることになったのだ。

「間に合ってよかった」

まどかが安堵のため息を漏らす。

「無茶し過ぎ…って怒りたいところだけど、今回に限ってはさえた手だったわ。これなら魔女を取り逃がす心配も――」

その時、人の気配がして二人は後ろを振り向くと、そこには黒く長い髪を揺らして歩くほむらの姿を見つけた。途端に、マミはほむらに対して敵意を露にする。

「言ったはずよね。二度と会いたくないって」
「今回の獲物は私が狩る。あなた達は手を引いて」

一触即発の光景に、おろおろとまどかが見守る。

「そうもいかないわ。美樹さんとキュゥべえを迎えに行かないと」
「その二人の安全は保証するわ」
「信用すると思って？聞いたわよ、あなた、キュゥべえを二度も襲ったって」

そう言って、後頭部のロールにしている髪にそっと触れて左手をほむらにかざす。するとその左手から鎖の模様が描かれた赤いリボンが現れて素早くほむらを空中に拘束した。

「…！ば、馬鹿。こんなことやってる場合じゃ――」

「もちろん怪我させるつもりはないけど、あんまり暴れたら保障しかねるわ」

そうじゃない、とほむらはかぶりを振った。

「今度の魔女は、これまでの奴らとはわけが違う…！」

「おとなしくしていれば帰りにちゃんと解放してあげる。でもその前に、あの子にも会わせてあげなきゃね」

（あの子……？）

「行きましょ、鹿目さん」

「え…あ、はい」

まどかは一度ほむらを見て、その後遅れてマミについていった。

「まっ――くうっ」

ほむらがまどか達を引きとめようと体を動かすが、その動きに反応してリボンが更に強くほむらを拘束した。その間に、まどか達はどんどん結界の奥へと進んでいってしまった。

一方、その頃――。

しんのすけ達野原一家は、みんな一緒に外出した。

マングースマンションがある方向には、みさえの行くデパートへの駅がある。つまり、一定の所まで来たらお互い行くべき場所に向け

て別れようということである。

「いや～助かったわ～。これ絶対に買いに行こうと思ってたのよ」

チラシを持ってルンルン気分で歩くみさえ。放っておくと、ステップを踏みそうだ。

「やれやれ、たぶん夜まで帰ってこないな」

「はは、違いねぇ」

小声でみさえに聞こえないようにしんのすけとひろしは会話する。みさえにおんぶひもでおぶられているひまわりもウンウンと頷いた。

「母ちゃん、チョコビお願いね」

「はいはい、分かってるわよ」

しんのすけは忘れかけていた事を思い出してみさえに釘を刺しておく。

これからみさえが買いに行くものはなんだとか、ついでにこれこれといったものも買って欲しいとか、会社で部下の川口がちょっとしたヘマをやらかしたとか、幼稚園でマサオ君が転んで泣いてしまったとかあれこれ家族で会話をしながら、マングースマンションと駅の方角へ歩いていく。

住宅街を越えて、商店街に入っていくと遠くに春日部病院が西に傾きかけている太陽に照らされているのが見える。あの周辺に駅があるのだ。あの場所で別れよう、とひろしは話した。

「しんのすけ、ちゃんとまどかちゃん達に謝りなさいよ」

みさえもお返しと言わんばかりに釘を刺す。

「ほーい」

「なあ、しんのすけ。どんな子なんだ？そのまどかちゃんって子とか、知り合った子たちは」

「！」

一瞬みさえはいつものひろしの女性にめっぽう弱い性格から来た質問と思い、ちらりとひろしの顔をみるが、普段の表情から単純な興味らしい。性格から来た質問なら、すぐに顔に表れる。しんのすけも同様だ。

「うーん…まどかちゃんはかわいい子だゾ、さやかちゃんはノリがいいし、マミおねいさんはだいなまいとばで～だゾ！えへ～」

「ふぅん」

ひろしもやはりしんのすけと同じターゲットが「大人の女性」なので、言うほど興味を示すような雰囲気はなかった。しかし、しんのすけがニヤけるほどのプロポーションを持つのなら、ちょっとだけそのマミという少女を一目見てみたいという邪な考えがふっとひろしの頭の中をよぎる。

そして春日部病院の玄関の前に到着し、そこで野原一家は足を止めた。ふと、周りを見渡すとさっきまで通っていた通りには人が沢山いたのに、この病院の周囲には人の気配が全く無いことに気付いた。

「なあ――さっきまであんなに人が沢山いたのに、なんでこの辺は人がいねぇんだ？」

「さあ…だけど気味悪いわ」

ひろしやみさえだけでなく、ひまわりもこの周囲に漂う不穏な雰囲気を感じて首をひっこめる。

「ま、まあとりあえずここで別れよう。じゃあ買い物楽しんでこいよ」

「え…ええ、じゃあ…」

まるでこの不気味な雰囲気から逃げるようにしんのすけ達はお互い別々に歩き出そうとしたその瞬間――。

「おわっ！」

「な…？！」

「な、なに？！」

ぐにゃりと景色が歪み始めて、野原一家たちはうろたえ始めた。

（あの時と同じだ！）

しんのすけはこの間の、魔女の結界に迷った時を思い出した。正気を失ったカスカベ防衛隊たちから逃げるたときもこうやって景色が歪んであの不思議な世界へ放り込まれたのだ。

気がつけばしんのすけ達は、あちらこちらに板チョコやホイップクリーム、キャンディといったおいしそうな巨大なお菓子が散らばっているお菓子だらけの空間の中に立っていた。

「どこ…？ここ…」

「俺たち、病院の前にいたハズだよな…」

ひろしとみさえはあたりを見渡す。しかし、先程の景色らしき場所

はどこも見当たらない。
すると、ひろしとみさえの声を聞き付けて、２つの影が野原一家の前に現れた。

「なに……こいつ？！」

野原一家の前に現れたのは、手足の生えた黒豆のような身体に網目状の一つ目が特徴の使い魔だった。ちょうどひろしと同じくらい大きい。
使い魔達はじりじりと野原一家に接近してくる。その度に小さな悲鳴を漏らしながら野原一家達は後退していく。
やがて壁まで追い詰められて、使い魔たちは野原一家に襲いかかるように飛びかかった。ひろしとみさえは覚悟を決めたようにぎゅっと目を閉じて、しんのすけをかばった。

その瞬間、一発の銃弾とピンク色の矢が使い魔たちの身体を貫いた。使い魔たちは悲鳴をあげる間もなく消滅した。

「……あれ？」

目を開けると、先程までいた使い魔が消えていた事に気づく。かわりにピンクと黄色の２つの光がこちらに駆け寄ってくるように近づいてくる。

「大丈夫ですか？」

聞き覚えのある少女の声。すると、光が払われピンクの光からまどかが、黄色の光からマミが現れた。
しんのすけとまどか達かが目が合ったとき、お互いに同時に言った。

「おおっ！まどかちゃん！マミおねいさん！」
「しんのすけ君？！」
「また迷いこんじゃったの？」

一方、ひろしとみさえは先程の使い魔やまどかとマミの登場とあまりにも非現実的な出来事に、目をパチパチさせている。
まどかが不思議そうにしんのすけの後ろにいる野原一家を見た。

「しんのすけ君、この方たちは？」
「オラの父ちゃん、母ちゃん、それに妹のひまだゾ」

茫然としているひろしとみさえの代わりにひまわりがみさえの背中からひょっこりと顔を出してまどかとマミに「や」と挨拶をした。
ちらりとマミは自分達が来た道に目をやった。

「ここで長々と話してちゃまずいわね。また使い魔が襲ってくるかもしれない。グリーフシードのこともあるし、移動しながら話しましょう」

野原一家はしんのすけを除いて訳がわからないまま、まどか達の後をついていく。
そこで冷静さを取り戻したひろしは、マミに尋ねた。

「すいません…ここはどこなんですか？」
「ここは魔女の結界と呼ばれる、とても危険な空間なんです」
「魔女の結界――？あの、できればすぐにここからでたいんですが……」
「そうしたいところですけれど、今ここから出られるのは難しいんです。大丈夫、魔女さえ倒せばあなた方は必ずここから出してあげられます」

ひろしとみさえはお互いに顔をあわせながら、魔女とはどういうことだろうと首をかしげた。
マミはまどかと自分の間を歩いているしんのすけの方を向いた。

「ごめんなさいね、しんのすけ君。もっと早く気付くべきだったわ。ご家族まで巻き込んでしまって――」
「あ、いえいえ、こちらこそウチのしんのすけが迷惑をかけてしまって…」

ここぞとばかりにみさえがしんのすけが迷惑をかけてしまった事を謝った。それにいえいえ、とマミとまどかは笑みを浮かべて首を横に振った。

「そんなことはないですよ」
「あれ？まどかちゃん。さやかちゃんとキュウリ君は？」
「この先にいるよ。だけれど……」

そこでまどかはマミの説明を挟んで、これまでの経緯をしんのすけに分かりやすく話した。当然ではあるが、ひろしとみさえは内容がさっぱり分かっていない。
一方、しんのすけもマングースマンションに向かう際に結界に迷いこんでしまった事を話した。

「でもこのまま、魔法少女見学会ができるから、ある意味時間短縮出来たんじゃないかしら？家族というオプションもついてるけど」
「いや～オラとしてはマミおねいさんと2人っきりでけんがくかいしたかったゾ」
「しんのすけ、失礼でしょ！」

しんのすけのナンパまがいの言葉にみさえが危険な場所ということを忘れてげんこつをしかねない程の勢いで怒鳴った。それを止めようと「まあまあ」　と抑えるひろし。
その光景を見て、まどかと供にいつもこうなんだろうなぁと苦笑いを浮かべながら、野原一家を見てふっとマミは自分でも驚くようなこわばった表情になった。その表情の変化をまどかは見逃さなかった。

「どうしたんですか？マミさん」

呼ばれてマミは一瞬目を見開いて何事も無かったように口元に笑みを浮かべる。

「え…？なんでもないわよ？私の顔になにかヘンなものでもくっついてた？」
「ううん…」
「さ、早く行きましょ。美樹さんとキュゥべえが危ないわ」

そう言って、ちょっとだけマミは歩む足を速めた。まどかはその様子に違和感を感じながらマミの後ろをついていった。

「ねぇねぇ、まどかちゃんとマミおねいさんってキュウリ君にどんなおねがいして魔法少女になったの？」
「え？」

突然しんのすけに言われて、まどかとマミは同時に声を出して、同時に目を丸くした。
結界の通路の中を歩いている中、ふとしんのすけが思い浮かんだ疑問をそのまま、まどか達に投げかけたのだ。

「んっとね、私はマミさんに憧れて魔法少女になったの」

そしてぽつりとまどかは語りだした。
元々自分は得意な科目もないし、なんの取り柄もなかった。誰にも役に立てなくて、こんな自分が嫌になっていた。
そこでマミと出会って、誰かのために戦っているところを見せてもらって、同じように自分も出来るかもしれないとキュゥべえに『誰かの役に立てるようになりたい』と願って契約したという。
マミはまどかが自分自身になんの取り柄も無いというコンプレックスを抱いていたことは知っていたが、自分に憧れを抱いていたことは初耳だった。それを聞いて、ちょっとばかり顔を下に向けた。

「どしたの？」

うつむいたマミの顔をしんのすけが覗く。その表情はどこか哀しげだった。

「憧れるほどのものじゃないわよ、私……」

基本的にその言葉は照れているときに言うものだ。しかし、マミが今言い放ったこの言葉は自傷するような感じだ。
そのままマミは続けて言う。

「無理してカッコつけてるだけで…怖くても辛くても、誰にも相談できないし、一人ぼっちで泣いてばかり。いいものじゃないわよ。魔法少女なんて」

そう、マミはずっと孤独だった。
ある時、交通事故で自分の両親を失い、自分も死ぬはずだった。そこへキュゥべえが現れて『生きたい』という願いと引き換えに魔法

少女になった。先程野原家を見て、あの表情を浮かべたのは、自分の家族と、家族と一緒に暮らしていた時を思い出したからだ。
マミはその願いに対して、後悔は抱いたこと無い。だが、魔女と戦うという非現実的な世界に放り込まれ、誰か親しい人に相談できないまま孤独と寂しさが彼女を追い詰めているのだ。

「マミさんはもう一人ぼっちなんかじゃないです」

自分の忌まわしい記憶を思い出して、悲しみに囚われようとしたとき、やさしくまどかの言葉が降りかかった。それを聞いて、マミは顔を上げた。

「…そうね。そうなんだよね」

だが、今は自分に憧れて魔法少女になった人が2人もいる。更にもしかしたら1人増えるかもしれない。魔法少女ではないが、傍には自分に内容はどうあれ、気にかけて言葉をかけてくれる幼い少年がいる。

「本当に、これから私と一緒に戦ってくれるの？傍にいてくれるの？」
「はい、私なんかでよかったら」

まどかは1グラムのためらいも無く笑みを浮かべて言った。その言葉に、マミの胸の内側と目の奥が熱くなるのを感じた。

「オラもいるゾ！」

まどかに続いてしんのすけも言葉を発する。

「オラ、魔法少女じゃないけどマミおねいさんやまどかちゃんのお手伝いがしたい！男は女の子を守るのがお仕事なんだゾ！」
「しんのすけ君……」
ひろしとみさえも、その光景を見守る。しんのすけの言葉は、いつものナンパではなく2人の少女を守りたいという気持ちでいっぱいだった。
「ありがとう…2人とも…参ったなぁ。まだまだちゃんと先輩ぶってなきゃいけないのになぁ…やっぱり私ダメな子だ」
マミは目元に浮かんでいる透明な雫を人差し指でふき取る。
「決めたわ。この戦いが終わったら、私と鹿目さん、美樹さんにしんのすけ君にキュウべえで魔法少女チーム結成記念でパーティをしましょう！」
「えっ？」
「ホント？」
ええ、と先程の哀しい表情なんて微塵も感じられないくらいの満面の笑みを浮かべてマミは頷いた。
「お祝いのケーキにご馳走も私が腕によりをかけて作ったげる」
「やったーっ！」
しんのすけは万歳をするように両手をあげて喜びを表す。まどかとマミ、ひろしとみさえも目を細めながらしんのすけを見た。
「みさえ、俺たちが思っていたよりも、しんのすけはオトナになっていたんだな」

「そうね」

しんのすけを見ながらみさえはちょっぴり、さっき怒鳴っていた自分が恥ずかしく思えてきた。ひまわりもあの輪に入りたいらしく、うらやましそうにしんのすけを見る。

しかし、この和やかな雰囲気もつかの間、マミとまどかの頭の中にキュゥべえのテレパシーが届いた。

（マミ！まどか！グリーフシードが動き始めた！孵化が始まる。急いで！）

まどかは焦るような表情を見せるが、マミは余裕を見せるように口元を吊り上げる。

「オッケー、わかったわ。今日という今日は速攻で片付けるわよ。鹿目さん、準備はいい？」

「ふぇ？…あ、はい！」

ふたりはソウルジェムの指輪を掲げると、それぞれの手の中に卵形の宝石が現れた。

するとそれがキラリと輝いて、まどかとマミは光に包まれた。

光が払われると、まどか達の身につけている服装が変わっていた。

学生服からまどかはピンクを基調とした、マミは黄色を基調とした文字通りアニメの魔法少女風な服装へと。まどかの胸元にはピンクのソウルジェムが埋め込まれており、マミが被っている帽子の装飾に黄色のソウルジェムがある。

マミは野原家に左手をかざすと、野原家の周りに円状の光が現れ、網目状の壁が作られ、ドームのように野原家を覆った。

「おぉ〜！」
「……」
しんのすけは感嘆の声を漏らすが、ひろしとみさえは言葉が出ないようだ。
「そこは安全です。すぐに終わりますから、ちょっと待っててくださいね」
そう言って、マミが先に通路を飛び降り、続いてまどかが飛び降りる。
使い魔たちが待ち受けるフロアの下部に着地する直前、マミの周りにいくつかの銀と黒の装飾がなされた古風な雰囲気を醸し出すマスケット銃が出現し、マミが着地と同時に銃口が下になるようにマスケット銃が床に刺さる。
マミから離れた場所でまどかも着地し、右手に先端が花のつぼみを模した装飾があるステッキを出現させた。それはUの字に曲がると、弓に変形してピンク色の光の矢が装填される。
これが魔法少女となったまどかとマミの武器だ。
まどか達の存在に気付いて使い魔が襲いかかってくる。
まどかはすぐさま矢を放ち、マミは遅れて落ちてきたマスケット銃を一旦手でくるくると回転させると、使い魔に向けて発砲する。単発式なのか、一発撃つ度に撃ったマスケット銃を投げ捨てる。マスケット銃を出現させて踊るように動いて使い魔に発砲する姿は野原家ならずまどかをも魅了した。
「す、すげぇ……」
アクション映画さながらの光景に、思わず野原家は息を呑んで見守

る。だんだん、目の前の光景が現実的なものと感じてきたようだ。

（体が軽い。こんな幸せな気持ちで戦うなんて始めて）

使い魔を相手にしながら、先程の出来事からマミの心の中には幸福感が溢れていた。両手にマミと同じくらい巨大なマスケット銃を出現させて使い魔に放つと、跳んで壁に刺さっている注射器のような足場の突起した部分に右足を乗っける。

（もう何も恐くない…！私、一人ぼっちじゃないもの！）

やがてものの1分もかからない内にこのフロアの使い魔を全滅させた。すると、通路の先に一枚の銀色のドアが出現した。
まどかとマミが野原家のもとへ戻ると、拍手で迎えられた。

「よっ、アンコールアンコール！」
「もう、しんのすけ君。見世物じゃないのよ。さあ、こちらへ急いで！」

マミはまどかの手を繋ぎながら野原家たちを銀色のドアへと誘導すると、一気にドアを開いた。
ドアの先には、やはりお菓子だらけの広大な空間が広がっていた。
奥にはやけに脚が長いテーブルとイスがある。

「おまたせ」

マミが巨大なドーナツに隠れるように身を潜めるさやかに声をかけた。

「はぁ…間に合ったぁ」

さやかは安堵の息を漏らすと同時に、野原家の存在に気付いて目を見開いた。

「しんのすけ――と…？」
「よ、さやかちゃん」
「ど、どうも…」

そしてお互いに軽い自己紹介をしていると、キュゥべえがみんなの前に現れた。

「気をつけて！出てくるよ！」
「！」

キュゥべえの言葉にしんのすけと魔法少女たちは奥へ顔を向ける。キュゥべえが見えないひろしとみさえは遅れてそれを見た。テーブルとイスの上部に『なにか』がボコボコと蠢いている。あれがマミの言うグリーフシードなのだろう。やがてグリーフシードから液体が漏れると同時に内側から小さな影が出現した。

「あれが…魔女なのか？」
「あら、可愛いじゃない」

ひろしは思わず拍子抜けしたような表情を浮かべ、みさえは魔女の容姿に能天気に率直な感想を述べた。グリーフシードから出てきた魔女は青いつぶらな瞳にキャンディのような形の顔に、だぼだぼの服とマントを身にまとっている。まるでその大きさもあいまってぬいぐるみのように見えなくも無く、確かにみさえが「可愛い」と言うのも頷ける容姿である。

魔女を見るなり、マミは素早くそこへ向けて飛び出していった。

「マミさん！アタシたちも――」

「大丈夫、問題ないわ！こいつは私一人で倒す！」

マミはまどかとさやかの加勢を丁重に断ると魔女が座るイスを蹴ってイスを倒させる。魔女はそのままマミの目の前にゆっくりと落ちてくる。

「せっかくのトコロ悪いけど、一気にキメさせて！」

そしてマスケット銃の銃身を持って、野球のバッティングをするように振るいボール代わりの魔女をかっ飛ばした。

「行くわよ！！」

壁にぶつけた魔女に向けて3発のマスケット銃による銃弾を放ち、銃弾は全て魔女の胴体に命中した。魔女が地面に落下したところでマミは魔女のこめかみにマスケット銃の銃口をくっつけて発砲した。するといくつものワイヤーのように細い黄色い糸が魔女を拘束して空中に浮かばせた。

「いやったぁ！」

「マミおねいさんかっこい～！」

さやかとしんのすけがガッツポーズをして勝利を確信した。マミもそう感じて会心の笑みを浮かべると、今まで使っていたマスケット銃とは比べ物にならないほどの、大砲を思わせる巨大なマスケット銃を出現させた。

「ティロ――」

銃口を魔女の胸に向けて狙いを定める。そして高々と宣言するように、

「フィナーレ！！」

巨大なマスケット銃から発射された弾丸はマミの狙い通り、魔女の胸を撃ちぬいた。そして糸がぎゅっと魔女の胴体を絞めつけると、ぷくっと魔女の頬が膨れ上がった。

その瞬間、魔女の口からぬるりと新たな、長くとがった鼻に、赤と緑のカラフルな瞳と頭部に赤と青の翼のようなものが付いているピエロのようなコミカルな顔が飛び出てきた。顔に続いて大蛇かイモムシを思わせるような赤い斑点のついた黒く長い巨大な体が現れた。

「？！」

あの小さな魔女の口から現れた、巨大な魔女の登場にマミだけでなくその場にいる全員が不意を突かれてその場に凍りつくように固まってしまった。

巨大な魔女はマミに急接近すると、ガパッと口を開いた。口の中には、鋭い牙と青い舌がマミを待ち受けていた。

そして――。

「マミおねいさん！！！！」

――同刻、結界内のとある場所にて。

カチリと、鍵が開けられるような音を立てて、ほむらの拘束が解かれた。
ほむらは地面に着地すると、嫌な予感を感じて自分の手元を見た。
手元には先程まで自分を拘束していたマミのリボンが、どろりと溶けていき、地面に吸い込まれていく。

「――まさか」

ふっと嫌な予感を感じて、ほむらは無表情の中に焦りを感じさせながら結界の奥へと走り出した。

その頃――結界最深部にて。

「……」

しんのすけ達はその光景に驚いて息を呑んでいた。

「グゥオオオオオオオオォォ！！」

なにかにもがき苦しんでいる魔女。そして地面には魔法少女の姿から元に戻った白目を向いて気絶しているマミの姿と、それをかばうひろしの姿があった。

――一体どうしてこうなってしまったのか、時を約３０秒戻していきたいと思う。

「マミおねいさん！！！！！」

しんのすけがこれまでにないくらい大きな声で死が迫ろうとしているマミを呼んだ。

すると、しんのすけ達の前に大きな影が横切ってマミと魔女に向かって走っていく。

「うおおおお――！！」
「？！」
突然の叫び声にマミと魔女の両者は声のする方向に驚いて顔を向けた。
そこには右手に何かを握ってこちらに走ってくるひろしの姿があった。
「しんのすけ君のお父さん――？！」
「バケモノめ――これでもくらいやがれぇッ！！」
間髪入れずにひろしはマミと魔女の間に向けて、右手に握ったそれを投げつけた。
それは、ひろしがさっきまで自分が穿いていた靴下だった。靴下は綺麗な弧を描いて、マミと魔女の間に落下していく。
「マミおねいさん！鼻つまんで！」
だが、しんのすけの警告は手遅れだった。彼女たちはそのひろしの靴下を無意識に嗅いだ。嗅いでしまった。
瞬間、今までに嗅いだ事のない凶悪な刺激臭が彼女たちを襲った。
魔女はその臭いに悲鳴に近い咆哮を上げ、体をよじらせながら涙目になって暴れる。一方マミは嗅いだ瞬間、意識が遠のいてまるでB級映画のように白目を剥いてバタリと倒れてしまった。同時に、服装も元に戻ってしまった。
そしてひろしは気絶したマミに駆け寄って、暴れる魔女の動向を見守るところで30秒が経った。
「父ちゃん！」
「あなた！」

「パッ！」
家族の声ではっとひろしは我に返ると、すぐさまマミを抱き上げてその場から逃げ出してしんのすけ達のもとへ戻ってきた。
「あなた、大丈夫？」
「あぁ…」
ひろしはそっとマミを降ろした。すぐにまどかとさやかが駆け寄る。
「マミさん！」
「大丈夫、気絶しているだけだ。このおじさん、お手柄だよ」
キュゥべえが冷静にマミの容態を見て言った。
「すごいですね…。魔女を追い払って、マミさんも助けちゃうなんて」
「なんか投げてたみたいだけど…一体なにをしたの？」
さやかの問いに、ひろしは少し恥ずかしくなって答えられなかった。自分の靴下の臭いでマミもろとも魔女を追い払ったなんて。
ひろしの靴や靴下は、とにかく臭いが強烈なのだ。しんのすけやひまわりがその臭いを嗅ごうものなら、すぐに気絶してしまうほどの臭さを有している（しんのすけいわく、『最臭兵器』『命に関わる』）。みさえも、靴下を洗濯する際はマスクを着用し、細心の注意を払って扱っている。本人もそれは自覚しており、時には今のように武器として使う事もあるのだ。
「ヴォオオォォォ！！」
「ひっ――！」

しかし、今の悪臭攻撃で完全に魔女を怒らせてしまったらしく、怒りの咆哮をあげる。びりびりと衝撃がこちらまで伝わってくる。

「ヤバイ…！マミさんは気絶しちまってるし…」

「さやかちゃん、こうなったら私たちで――」

「その必要はないわ」

まどか、いやその場にいる全員の耳元に、１人の少女の声が聞こえた。

「ほむらちゃん！」

しんのすけとまどかが同時に声を上げた。目の前の柱の上ににいつの間にかほむらが白と黒の服装で相変わらず無表情で立っていた。

「こいつを仕留めるのは、私」

そう言って、魔女をにらみつける。苛立っている魔女も、ほむらに狙いをつけたようだ。

魔女はほむらに向けて喰らいつこうと襲い掛かる。しかし、ほむらは魔女が接近してくる瞬間、別の柱へ移動していた。

ほむらが移動したことに魔女は気付くと、向きを変えてほむらに再び喰らいつこうとする。しかし、またほむらは別のはしらへ瞬時に移動する。

そうやって何度も何度もそれを繰り返し、ほむらは魔女を翻弄していく。そして何度目か、魔女は大きな口を開けた瞬間、ほむらは盾から何かを取り出してそれを魔女にほうりなげて別の柱へ瞬間移動した。

「？！」

すると、ボン！と音を立てて魔女の口の中が爆発した。その衝撃でぐったりと魔女は動きを止めた。やがて次々と爆発が起きて、爆発が起こるたびに魔女は脱皮をして回復するが、爆発は収まらない。そして脱皮が追いつかなくなり、魔女は体の内側から大爆発し、完全に消滅した。

消滅したと同時にほむらは地面に着地し、魔女から出る煙をバックに魔法少女の姿から学生服の姿に戻りながらしんのすけ達のもとへ歩んで言った。

「命拾いしたわね、巴マミもアナタ達も。てんで覚悟がたりないみたいね。魔法少女になるということは、こういうことよ」

魔女が消滅したことによって景色がぐにゃりと歪み、元の春日部病院前の景色に戻っていく。

それと同時に空から小さな黒い物体がゆっくりと落ちてきた。あの魔女のグリーフシードである。ほむらがそれを取ろう再び歩き出した。それを見てしんのすけは我に返ると、まどか達から離れて走り出し、ほむらよりも先にグリーフシードを拾った。

「しんのすけ？！」

「……」

ぴたりとほむらは足を止めて、またキュゥべえを連れて行ったあの時のように冷たい視線をしんのすけ送った。しんのすけも口を一文字に結び、グリーフシードを両手に握りながらほむらの目を見る。

「野原しんのすけ、それを渡しなさい」

「やだ！」

いつも女の子に弱いしんのすけが、珍しく敵意を抱いている。

「どうして」

「じゃあなんでほむらちゃんもキュウリ君のことをいじめるの？教えてよ」

そこで沈黙が訪れる。しんのすけとほむら、それからキュゥべえが見えないひろしとみさえ以外はキュゥべえの方へ視線を寄せた。キュゥべえは黙ってしんのすけとほむらの動向を見守る。

「前にも言ったでしょう？『あなたには関係のないことよ』って。それに、私の忠告も守れなかったみたいね」

もう二度と、私とこいつに関わらないことね。今までのように、平和な生活を送りたければ――という事だ。

「なんであなたはキュゥべえにそこまでこだわるのかしら」

「違うもん、ほむらちゃんにどうしていじめるのか聞きたかっただけだもん！」

「私に――？同じ事をなんべんも言わせないで。もう関わらないで欲しいわ。さあ、それを渡しなさい」

今、優しく言っているうちに、とほむらはしんのすけに右手を差し出した。

「教えなきゃ渡さないゾ！」

「そう、なら――」

その時、ほむらが言葉を言い終える前にしんのすけはグリーフシー

ドを口の中に放り込んだ。そのしんのすけの行動に野原一家、まどか達、そしてほむらまであんぐりと口を開いて驚いた。これはしんのすけがほむらのあの不思議な瞬間移動の力を読んでの行動だった。口でモノを挟む力と尻の力なら誰にも負けないしんのすけならではの行動である。

「吐き出しなさい！早く！」

「ひゃへふはべわはないほ！（しゃべるまで渡さないゾ！）」

ほむらの言葉を無視して、グリーフシードを口の中に留まらせる。しんのすけが飲み込めるような大きさではないが、同時にほむらもしんのすけの口からグリーフシードを取り出せない。

しかし、舌がグリーフシードに触れた瞬間、すぐにしんのすけはグリーフシードを吐き出してしまった。

「ばあああ…ゲロたべてるみたい…」

「……」

少し引きつった表情を浮かべながらも、ほむらはまたキュゥべえを連れ去ったように半ば呆れた。納得させなければ、一生ついてくるかもしれないわね、この子は。

「……わかったわ、野原しんのすけ。アナタがそこまでするのなら、話してあげるわ。何故私がキュゥべえを追うのか――」

「！」

しんのすけはグリーフシードのあまりの不味さに表情を歪ませつつ、ちゃんとほむらの言葉は聞き取って顔を上げる。

「今週の日曜日、かわのそば公園で待ち合わせしましょう。そこで

アナタに全部話すわ」
「ホントに？」
「ええ、嘘は言わないわ」
ただし、とほむらは付け加えた。
「私から、いくつか条件を出させてもらうわ。それを一つでも破ったら――」
それ相応の覚悟をしておくことね。とほむらは告げた。
【つづく】

3．もう何も恐くないゾ（後書き）

次回予告

ほむらに厳しい条件を告げられながらもキュゥべえを襲う理由を明かす約束を交わすことが出来たしんのすけ。
まどか達とともに綿密（？）な作戦を立て、ついにその日が訪れた。
そして約束どおり、ほむらがキュゥべえを襲う理由を語ろうとした瞬間、ある事件が野原一家に降りかかる――。

小説　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ六人の魔法少女たち　ぱーとふぉー　お楽しみに！！
追記：諸事情でぱーとふぉーの公開はちょっと延期になります。申し訳ありません。

4．それは、とってもうれしいゾって（前書き）

【前回のあらすじ】
よう、野原ひろしだ。
確か、まどかちゃん達と知り合ったしんのすけは、魔法少女のノウハウをマミちゃんとキュゥべえから教わったんだ。
そして魔法少女体験をまどかちゃん達と約束して、家に帰宅した。
だけどみさえがしんのすけの行動に怒って、翌日まどかちゃん達に謝りに行こ　うとしたんだ。そこでまあ、みさえの苦労を感じた俺が代わりに行こうということで、みさえは買い物に行くためにとりあえず皆で家を出たんだ。
そこで俺達は魔女結界に捕らわれてしまった。そこでまどかちゃん達と再会して、結界を脱出するために行動を供にしたんだ。確かに、あのプロポーションならマミちゃんは将来が期待でき――（みさえからげんこつを受けました）。

……そのあと、魔女結界の奥でさやかちゃんとキュゥべえと合流してマミちゃんはグリーフシードってやつから産まれた魔女と単独で戦うことになったんだ。
最初はマミちゃんが圧倒したんだけど、本性を現した魔女が、マミ、現れちゃんを食い殺そうとしたんだ。そこへ颯爽と現れ、足の臭いを使ってマミちゃんを助ける俺！くう～かっこよかったよな？なあ？
そして気絶したマミちゃんの代わりに現れたのが、依然しんのすけを助けたほむらちゃんだった。ほむらちゃんは魔女を翻弄しながら、魔女を倒して結界から脱出することに成功したんだ。
だけど、しんのすけは何故ほむらがキュゥべえを襲うのか理由を聞こうとしたんだ。しんのすけの意外な行動もあって、ほむらちゃんはかわのそば公園でしんのすけにキュゥべえを襲う理由を明かすことにしたんだ。

あんな条件を出されて、ほむらちゃんは破っちまったら覚悟はしておけって言っていたけど、大丈夫だ、しんのすけ。なにがあっても俺と母ちゃんがお前を守るからな――。

4．それは、とってもうれしいゾって

――野原家にて。

あの後、臭いで気を失っているマミを一番近場である野原家に運ぶことになり、その流れでまどか達魔法少女組は野原家に上がってマミの様子を見る。
マミは野原家に運んで寝室に寝かせると、１０分もしない内に起き上がった。どうやらマミは気絶した前後の記憶は覚えておらず、一体なにが起きたのかみんなに説明を求めた。そこでまどかとさやかが結界内でマミが気絶した後の事を話すことになった。
自分が魔女に食い殺される直前にひろしが助けてくれたことを聞くと、マミは少しばかり目を見開いてひろしへ顔を向けた。

「本当なのですか？」
「え？…ああ、まあ…」
「本当だよ、マミ。この人は君の命を救ったんだよ」

キュゥべえがそう答えたところでマミは目を輝かせながら、まごつくひろしの手のひらを両手で包むように握った。

「あの、どうもありがとうございます！ひろしさんは私の命の恩人です、このお礼はいつか必ず返します！」
「えぇ…あ…あはは…」
（いいなぁ、父ちゃん）

ひろしは返す言葉も思いつかずに、ただ乾いた笑みを浮かべるだけだった。

その後、ほむらが現れてマミの代わりに魔女を倒し、グリーフシードをそのまま回収しようとしたところでしんのすけがそれを阻止してグリーフシードをだしにほむらと条件付で何故キュゥべえを襲うのか、その理由を日曜日に明かすところで話を終えた。

「そう…そんなことがあったのね」

姿勢よく正座をしながら、一人で考え込むように腕を組んだ。

「あの、キュゥべえってなんのことなの？」

さっきから交わされるキュゥべえの意味が分からず、たまらずにみさえはまどか達に尋ねた。

最初、まどか達はひろし達がキュゥべえを知らない事にちょっと驚くが、すぐにキュゥべえはそもそもしんのすけという例外がいるものの、魔法少女と魔法少女候補者以外には姿が見えない事を思い出した。同時に、それほどキュゥべえは身近な存在になったんだな、と感じた。

「キュゥべえは、私達魔法少女をサポートしてくれるパートナーみたいなものなんです」

説明するのが少々難しいため、まどかは頭の中で言葉を必死に探しながら続ける。

「同時に、魔法少女の候補になる女の子と1つの願いと引き換えに『契約』して、魔法少女にする役割も持ってます」

「じゃあまどかちゃん達もその…キュゥべえってヤツと契約して魔法少女に？」

「はい。だけれど、キュゥべえは魔法少女とその候補の女の子にし

か見えないんです。…しんのすけ君という例外がいますけど」

それを聞いて、ひろしとみさえの疑問が解けた。

今までしんのすけが独り言をしゃべっていたのは、そのキュゥべえとやらという自分達には見えない存在としゃべっていたということだ。段々、ひろしとみさえは『あの時』の思い出と魔女結界の件も手伝って魔法少女やキュゥべえというものが信じられるようになってしたようだ。

「それじゃあ俺たちがそのキュゥべえが見えないのは候補者じゃないからか」

残念だなあ、とひろしはあぐらをかきなおした。

「しんちゃんは僕が契約したい少女の取り次ぎ役をしてくれるからね。残念だけど、なんの関係もないこの2人には姿を見せるわけにはいかない。ルールだしね。だけどこうやってテレパシーで声を聞かせることは出来るよ」

「うおっ？！なんか聞こえた？！」

「私も…！」

そんなまどかやキュゥべえとひろしとみさえ達のやりとりをテーブルに両手を乗っけながらしんのすけは見つつ、ほむらと交わした約束を思い出した。

――2時間前、春日部病院前。

「私から、いくつか条件を出させてもらうわ。それを一つでも破ったら――それ相応の覚悟をしておくことね」

ほむらから宣告され、ごくりとしんのすけは身構えた。
「かくごってなに？まかさオラの身体を――？！いや～ん」
「んなこと誰も言っとらんわ！！」
「……」
しんのすけにひろしとみさえとさやかのツッコむ光景に再び呆れながらほむらは人差し指を立てて１つ目の条件を表す。
「まず、１つ目の条件は『キュゥべえを連れてくること』よ」
「！」
「……」
周囲が驚く中、キュゥべえだけは落ち着いておりほむらを静かに見据えている。
しんのすけ達がなにか言う前に、ほむらは先手を打った。
「心配する必要はないわ、あなたやキュゥべえが妙なマネさえしなければ殺したりはしない」
いわゆる人質だ。理由を明かすための人質ということか。
そしてほむらは人差し指を立てたまま、今度は中指を立ててピースするような手の形になった。２つ目の条件だ。
「２つ目の条件は、野原しんのすけ、あなた一人で来ること。あなた達のご両親には関係のないことだし、魔法少女といざこざを起こしたくないの」
「ふざけるな！俺たちの子供に手は出させねえぞ！俺たちも行かせてもらう！」

ひろしがいきりたってほむらに怒鳴る。それでもほむらは眉をぴくりとも動かさない。
そのままひろしに向かってほむらは口を開いた。
「……そこまでいうなら、構わないわ。ただし、鹿目まどか、美樹さやか、巴マミはかわのそば公園の周辺に一切近付かないことは譲れない」
「どうして？ほむらちゃん…」
「鹿目まどか、あなた達には知っていいことと知らないほうがいいこともあるということよ」
「なんだよそれ……アンタ……」
さやかがいきりたってほむらに掴みかかるために詰め寄ろうとするが、みさえとまどかがさやかを抑える。
最後にとほむらは薬指を立てて3つの指を立てた。
「この事を、今の3人に話さないこと。理由はさっき述べた通りよ」
今度は誰も反撃はしなかった。ほむらはまどか達から目線を地面に移してしんのすけを睨らみながら言った。
「これが条件よ。待ち合わせ時間は午後の1時に来て。守れないようなら日曜日にかわのそば公園に近付かないことね。そのグリーフシードはあなたにあげるわ。汚いし」
ほむらは身を翻しながら、背を向けて商店街へと歩き始めた。そこでなにかを思い出したのかほむらは足を止めて、背を向けたまま、
「ついでに言っておくけど、かわのそば公園の近くに私は住んでい

るから、あなた達が怪しい行動をしててもすぐに分かるわ。いいわね？」

そう告げて、ほむらは商店街の奥へ消えていった。

（ほむらちゃん……）

ボーッとしながら、しんのすけは頭の中でほむらの事を考えていた。最初に出会った時のあの微笑みは、一体なんだったのだろうか。今まで見ていると、確かにマミやさやかが嫌悪感を抱いてもおかしくないくらい冷酷だ。
だが、今日の魔女の一件でマミが気絶してピンチに陥ったときに、ほむらが助けに来てくれた。グリーフシードを狙っているかもしれないが、そう考えておきたい。
しんのすけが女の子に関してはこと五歳児離れした思案にふけっていると、みさえが声をかけてきた。

「しんちゃん、どこか具合でも悪いの？」

さっきから大人しくしているしんのすけを見て、心配して声をかけたのである。

「ううん、なんでもないよ」
「あんな事があったからでしょうね。しんのすけ君、疲れているのよ」
「私達も、ここにいたらお邪魔だし…一旦帰って日曜日の事を考えよう？」

まどかの意見にさやかとマミとキュゥべえは同意し、４人は同時に立ち上がった。それを見て、みさえが４人を引き留めた。

「あの、よかったらウチで夕食たべていったら？このくらいしかお礼は出来ないけれど……」

４人はちょっぴり目を見開くと、

「いや、そんな…悪いですよぉ」

さやかは困ったような笑みを浮かべてお断りしようとする。

「でも本心は？」

「とってもうれしい」

しんのすけに茶々を入れられて、ついさやかは本当に本心のまま言葉を発した。

はっとしてさやかは我に返り、まどかとマミを見ると、やれやれと苦笑を浮かべていた。

――その夜。

「あの……本当にいいんですか？」

目の前に出されたものを見て、まどかは遠慮がちに訊ねる。

まどか達に出されたもの――それはすき焼きだった。コンロの上の鉄鍋の中には、みさえの実家から送られた薄切りの牛肉や、しいたけ、豆腐、ネギ、キャベツ、しらたきがタレに煮られている。

「いいのいいの、たんと食べて」
「そうだよまどか、遠慮なんかしてたらどんどん無くなっちゃうって」
ちゃっかりさやかも野原家と混じって主に牛肉を溶いた生卵に絡ませて食べる。
「んーめちゃうまッスよ、みさえさん」
「それはよかったわ～」
満足そうにさやかが肉を食べて用意をしてくれたみさえに感想を述べ、隣ではマミが主に野菜などを食べてながら、ビールを片手に持ってすき焼きを食べているひろしと自分の魔法少女の体験談を語っている。
「へぇ～数年前から魔法少女を？」
「ええ、色々大変なこともありましたけれども、これからはみんなと一緒にガンバっていくつもりです」
そう言って、マミはすき焼きを食べるまどかとさやかを目を細めながら見る。
「鹿目さんも美樹さんも、初めて見たときよりも腕がかなり上達しましたわ。将来が楽しみです。あまり私もうかうかしていられないわ、かわいい後輩に、あんまり格好悪いところ見せられないですもの」
そんなマミを見て、（まだ中学生なのにしっかりとした、いい先輩だなぁ）とひろしは感心して小さく頷いた。

「でもうらやましいわね～私も魔法少女になりたいわぁ」
みさえが幼いときに見ていたアニメの影響もあって魔法少女に憧れていた自分の事を思い出し、魔法少女に想いを馳せる。
「ねぇ、ダメもとでそのキュゥべえって子にお願いできないかしら？」
「母ちゃんは年齢的に魔法少女になるのは無理ですな」
「ウンウン」
しんのすけの言葉にひろしとひまわりのみならず、こっそりと気付かれぬようキュウべえとさやかも頷いた。さすがにお客さんがいる手前おしおきは出来ないが、
「しばくぞきさまら…」
みさえは顔を赤くしながら小さな怒りに身をふるわせた。
頃合いを見て、マミは食事の手を止めて向かいに座っているしんのすけにたずねた。
「しんのすけ君、大丈夫なのかしら？」
「なにが？」
「ほむらさんの事よ」
マミの言葉にその場の全員が食事の手を止めてしんのすけに視線を集中させる。
「う～ん、めんどくさいけどオラ、行かなくちゃ」
「めんどくさいってか、しんのすけが撒いた種でしょーがよ」

さやかにツッコまれるしんのすけを見て、まどかはふと、ほむらに何故そこまでこだわるのか尋ねてみたくなった。それは単純な興味だけでなく、さやかやマミと違い、しんのすけと同様一見冷酷に見えるほむらに、何かを感じた事に無意識に共感を抱いたからだ。

「……しんのすけ君はほむらちゃんにそこまで聞きたいの？」

「そうだよ。あの転校生、なに考えてんのかさっぱり分かんないだよ？もしかしたらしんのすけをしつこいと思って――」

「ほむらちゃんはそんな悪いやつじゃないと思うゾ」

しんのすけはさやかのほむらに対する疑惑をなんのためらいもなくぴしゃりと撥ね付けた。

それを見て、まどかは続けて質問を続けた。

「どうして？」

「それはね……かくかくしかじか」

「ホントにかくかくしかじかっていうなよ！」

そして今度こそしんのすけはほむらに対する思いを話した。

ほむらが自分に笑いかけてくれただけで悪い人じゃないというだけでは納得させるのは難しかったが、ほむらに対する気持ちに共感できたまどかとしんのすけの女性に対する倫理観を理解してるひろしとみさえはしっかりと受け止められた。

「だからオラ、ほむらちゃんに聞いて、キュウリ君をいじめる理由を聞きたいんだゾ」

「なるほどね、そこまでして暁美さんに聞きたい理由はそういうことだったの。…でも理由はどうあれ、あの子がどう出てくるのか分からないわ、場所まで指定してくる位だから攻撃してくることも否定出来ないわね」

腕を組んでウンウンとあれこれ考えるマミ。そのマミの行動にひろしははっと気付いてマミに問うた。

「マミちゃん、まさかあんたも一緒に来るつもり…なのか？」

「ええ、さすがに堂々とは来れませんけれど…。暁美さんに対抗できるのは私ぐらいですし、なにより野原さん達に命を助けてもらったのに、このまま放っておくわけには行きませんわ」

それに、しんのすけ君も私の大事な仲間ですから、とウインクをした。

マミに反撃する言葉も思いつかずに、黙って野原一家はマミ達の好意に甘えることになった。

そして、野原一家とキュウベえはほむらと会話をしている間、まどか達魔法少女は公園の周囲でほむらに気付かれぬよう身を潜めて、なにかあればすぐに飛び出して、ほむらを取り押さえるという事になった。

「アタシ達が加勢するのはいいけどさ、そのかわのそば公園ってところってどんなとこなの？しんのすけ、知ってる？」

「うん、知ってるよ。いつもそこらへんの公園であそんでるから」

「直接見に行って考えたいところだけれど、あの家の近くに暁美さんは住んでいるのでしょう？ヘタに下見すれば、見られる可能性は否定できないわ」

また考え込もうとしたとき、しんのすけが芝居かかったように立ち上がってトンと拳で自分の胸板をたたいた。

「大丈夫だゾ、オラにまっかせなさい！いっぱい秘密のかくれ場所しってるから」

「本当に？」
「マミさん、たぶん大丈夫だと思います」
まどかは、自分達としんのすけが初対面のあの日の帰りに、３人一緒に帰った時にしんのすけが街路を無視して通ったこの家への近道を通った時の事を思い出した。ああいった幼い子供達しか知らないような裏道を知っているのならば、しんのすけの言う「秘密のかくれ場所」といったものにちょっぴり期待できると思ったからだ。
「しんのすけ、まさかまた他所様の家を通っているの？」
しんのすけの言葉にジロリとみさえが睨みつける。
「い、いや…そんなことないゾ」
「まあまあみさえさん、今はそんなこと言ってる暇はないですって」
さやかになだめられるが、やはり納得できないのか「フン」と大きな鼻息をもらしてみさえは不機嫌そうに腕を組んだ。
「通信手段なら僕に任せてくれ、テレパシーならほむらにも気付かれないだろう」
きゅっぷいと焼き豆腐を食べてげっぷ（？）をもらしたキュゥべえが、身を乗り出した。
「わかったわ。野原さん、暁美さんと話している間、なにかあればキュゥべえが私たちに知らせてくれます」
「あ、はい」
そしてマミは顔をしんのすけに向ける。

「あとはしんのすけ君、時間があればそのかわのそば公園の秘密の場所を写真かなにかで私たちに見せてくれないかしら？そうすれば、私たちもすぐに助けにいけるから」
「ブ・ラジャー！」
（ブラジャー……？）

そして作戦会議兼夜の宴が終焉を迎え、しばらく食休みをしたのちに三人は帰宅することになった。
マミはこのまま何もしないのは悪いからと、みさえの皿洗いを手伝い、さやかはひまわりを抱きかかえて、いないいない、バア！とあやしている。そばにはキュゥべえがその光景を見ていた。

「ほ～らひまわりちゃ～ん、ミカちゃんでちゅよ～」
「へっ」

さやかが笑みを浮かべておもちゃ箱にあった女の子の人形を横に軽く揺らしながらひまわりに見せると、子供だましの遊びにひまわりは鼻で笑ってあしらった。
そのとても赤ん坊とは思えぬ反応に、一瞬さやかの目が点になった。

「はえ…？」
「ち、ち、さやかちゃん、ひまはそんなのじゃ喜ばないゾ」

しんのすけが人差し指を左右に振っているところを見てじゃあなになら喜ぶんだよ？とさやかが返す前にしんのすけは自分の上着の中から切り取られたイケメンの写真のお面を取り出して、顔に装着した。

「ほーらひまちゃ～ん、亀梨達也クンでちゅよ～」

「きゃーいッ！！」
「？！！」

人形を見せたときとは１８０度違い、求めるように手を伸ばして興奮するひまわりに再びさやかの目が点になる。

「え……えぇ～……」

引きつった笑みを浮かべ、呆然としているさやかに抱きかかえられているひまわりにそっとイケメンのお面を渡してやると、後ろから自分の名前を呼ばれて振り向くと、まどかが立っていた。

「どしたの？まどかちゃん」

まどかはしゃがんでしんのすけに目線を合わせる。

「ちょっと、２人で話でもしないかな、って」
「うん、いいよ。こっちおいでよ」

２人はさやかとひまわりとキュゥべえを置いて、寝室の縁側の近くまで来て、夜空を見上げる。月は雲に隠れて出ていないようだ。

「ねぇ、しんのすけ君。さっきの、ほむらちゃんのことだけど――」
「うん」
「ホントに助けてもらったの？」
「ホントだゾ、まどかちゃん、オラのことうたがってるの？」
「ううん、そういうことじゃなくって…」

まどかはかぶりをふって続けた。

「私もね、ほむらちゃんは悪い人って思ってないの」
「まどかちゃんも？」
「ウン」

そう言って、今度はまどかが語りだした。
まだ自分が魔法少女になって本当にすぐの時――ほむらが学校に転校してきたときの日、魔女の結界内を探索中付き添ってきたマミとさやかと散り散りになってしまい、まどかは偶然結界の最深部で魔女と対峙することになった。
初めての戦闘ということもあって、徐々に追い詰められるまどか、そこへほむらが現れ、あっという間に倒してしまったという。
それから数日後、その出来事でほむらに助けられて、「やっぱりなにも出来ないんだ」と自責の念に駆られていたところにほむらが優しく諭してくれたという。

――アナタは自分を責めすぎているわ。鹿目まどか。
――え？
――アナタを非難できる者なんて、誰もいない。いたら、私が許さない。

そこから会話が少しではあるが弾んでいき、その日から徐々にまどかはほむらにさやか達とは違う印象を抱いた。

「ほうほう」
「私もね、しんのすけ君の言ったようにほむらちゃんが悪い人って思えないの。今日もどうしてマミさんと喧嘩になっちゃったのかなって。それにキュゥべえも……」
「うーん…これはなにかカラクリがありますな」
「カラクリ…？」

まどかは腕を組んで目を閉じてうなずいているしんのすけをキョトンとした表情で見る。

「そ、たぶんほむらちゃんとキュウリ君にはただならぬインゲンがあるんだゾ」

「インゲンじゃなくて因縁じゃないかな」

そこでまどかはしんのすけと出会う以前――サトーココノカドーの立ち入り禁止のフロアに魔女の気配を感じて3人で歩き回っていたとき、傷つきながら逃げるキュゥべえとそれを追うほむらの姿を見た。

そのほむらの目つきはとてもあの時のほむらとは同一のものとは思えなかった。無表情であるが、あの黒曜石のような瞳にキュゥべえに対して、怒りと憎しみの光を宿していた。印象からして、まどかは一つの願いをかなえてさせてもらった人の態度とは思えなかった。言われてみれば、彼女とキュゥべえの間になにかあったのかもしれない。

「だからオラ、日曜日に聞いてみるよ。ぜんぶ聞いたら、こっそりまどかちゃんだけに教えたげる」

「エへへ…。ありがと」

「鹿目さーん、もうそろそろ帰りましょう！」

マミの呼びかけに、「はーい」と間延びした返答をして、まどかはしんのすけと供に寝室からリビングへと移動した。

「あの、すき焼きご馳走さまでした！」

「いいのいいの、また遊びに来てね。アナタ達なら大歓迎よ」

玄関前で、背後にさやかとまどかを控えさせているマミのお礼の言

葉にみさえは快く応じる。

「それじゃあお互い日曜日、健闘を祈りましょう」

「ほい！」

しんのすけはマミと握手を交わして、野原一家と魔法少女は別れた。夜の住宅街の奥に消えていくまどか達を、しんのすけは手を振って見送った。

「またねーまどかちゃーん、さやかちゃーん、マミおねいさーん、キュウリくーん」

「またね、しんのすけ君」

そしてその翌日から早速しんのすけは行動を開始した。

まずは、ひろしと供にほむらに見つからないように裏道を通ってかわのそば公園まで来ると、途中しんのすけの趣味で犬の糞とツーショットしたり、ホテルの看板を撮ったりしたが、なんとかまどかたちに言った秘密の場所とその周りを写真に撮った（後にさやかからの情報で、あの後ほむらはちゃんと学校に来ていたらしく、ほむらに見られることは杞憂に終わった）。

そしてあらかじめ登録しておいた3人の連絡先に写真とひろしがまとめたその周囲の情報をメールにしてそれぞれに送った。

一方のまどか達もメールが送られてきてすぐにマミの家に集まって、綿密な作戦会議が開かれ、それぞれ離れた場所から野原家とほむらを囲むような三角形を作るようなフォーメーションを取るようにした。

野原家とほむらが会話しているときの連絡手段もマミが習得しているテレパシーを利用することになった。
学校にいる間、特にほむらはまどかやさやかに対してこれといった態度を見せず、まどか達も作戦がバレないようにとほむらに関わらないようにしてきたが、一方でまどかは「実はもうバレているんじゃないかな…？」と一抹の不安を覚えた。

――そして約束の日曜日が訪れた。

まどか達は先に早起きして、キュゥべえと別れるとすぐにしんのすけとひろしが教えた秘密の道を使って、身を隠しながらかわのそば公園に向かう。そしてまるで獲物を狙うスナイパーのようにまどかは公園の入り口付近にある空き家の塀の内側から（すぐそばには調度小柄なまどかが通れる小さな穴があるので、そこから飛び出せる）、マミは大胆にも公園内にある遊具の、牛の尻公園にも設置されている穴あきのドームのなかに身を潜め、さやかは公園内のベンチのそばにある塀の内側の家の植木の中に身を潜める。

野原一家は朝食をしていると、どこから入ってきたのかキュゥべえが一家の前にやってきた。

「おはよう、しんちゃん、ひまわりちゃん」
「よっ、キュウリ君」
「やっ！」

しんのすけとひまわりの間にキュゥべえが接近してきて、しんのすけとひまわりはそれぞれ食事をしながら手を上げて挨拶をした。

2人にはまるでこれから行われることになんの緊張感も見えない。しんのすけが「キュウリ君」と言ったことにしんのすけとみさえは反応して、ひろしがしんのすけに尋ねた。

「しんのすけ、キュゥべえが来たのか？」
「うん」

キュゥべえは一度自分をいじっているひまわりを見ると、

「ひろしさん、みさえさん、これからひまわりちゃんはどうするつもりなんだい？」
「ひまを…？」

言われてみれば、ほむらとの件に関してひまわりの存在を完全に無視していた。ひろしとみさえはお互いに困ったように顔をあわせ、
「そうだなぁ」とひろしは小さく呟いた。
結論はすぐに決まった。

「あなた、ひまはお隣のおばさんに預けておきましょうよ」
「ああ、それがいいな」

みさえの言う隣のおばさんとは、文字通り野原家の隣の家に北本というおばさんが住んでおり、野原家が遠く離れたアパートからここに引っ越してからの顔見知りで、みさえとは立ち話をする仲である。いつも野原家が遠くに出掛ける際にはシロを預かってもらい、何度かひまわりも預かったこともある。そこからひろしとみさえはほむらとの会話中なにかあってもいいように、ひまわりを隣のおばさんという安全な所に避難させようと至ったのである。
そしてとうとう家を出る時間が訪れた。

しんのすけ達は隣のおばさんの家に行ってインターホンを押すと、すぐにドアが開かれておばさんが出てきた。おばさんに怪しまれないようにひろしとみさえは作り笑いを浮かべると、

「あら、どうしたの野原さん。一家揃って」

「オラたち公園でほむ――むぐっ！」

しんのすけが口を滑らせかけ、ひろしがその口を押さえると、みさえは抱きかかえているひまわりをおばさんの前に差し出した。

「すいません、ちょっと私たち遠くに出かけるのでひまを少し預かってくれませんか？」

「なーに、いつものことじゃない。野原さんどうしたのよ？そんなかしこまっちゃって」

「いえ、そんな…」

「たいや～」

ひまわりを優しく受け取って抱きかかえながら、おばさんは「じゃ、行ってらっしゃい」と言って家の中へとひまわりを連れて家の中へ戻っていってしまった。その際に、ひまわりがこちらに手を伸ばしていく姿を見て、ひろしとみさえはもどかしい気分になる。

「やれやれ…2人とも、ほむらちゃんがオラたちをコーゲキすることなんて絶対ないゾ」

しんのすけは心配性になっているひろしとみさえに両手をあげて呆れている。

「どうだろうね、ほむらは僕からしたら得体の知れない奴だからね。なにが起こるかわからない。これは懸命な判断だよ」

しんのすけの右肩に捕まっているキュゥべえが、地面に落ちそうになって体勢を直しながら言い放った。

しんのすけ達野原一家は隣のおばさんの家から離れ、かわのそば公園を訪れると、確かにほむらがいた。
ほむらは（しんのすけ達同様気付いていないが）、ちょうど塀を隔ててさやかが潜んでいる場所の前のベンチに腰掛けて、赤い表紙のよく分からない厚くて大きな本を膝に広げていた。だが、熱心に読んでいるような感じではなく、ただ文字を眺めているような――ひまをもてあましているような感じだった。

「もう後には引けないよ、みんな」
「ああ…」

しまった、とひろしはまどか達を含む全員に放ったキュゥべえのテレパシーに普段のように口に出してしまい、今度は自分の口を両手でふさいだ。
「バカ！」と言わんばかりにみさえが肘でひろしをどついていると、ほむらが顔を上げてこちらを見ている事に気付いた。しんのすけとほむらの2人の黒い目が合う。
一瞬の間が開き、ひゅうと風が吹いてほむらの黒い滝のような髪を優しくなでる。ふと気付くと、この公園にはほむらと自分達を除いて誰もいない。日曜のお昼なのに。

「よ、ほむらちゃん」

先手を打ったのはしんのすけだった。いつものように手を挙げてあいさつをする。
ほむらは表紙と同じ赤い色のしおりをひっぱると、広げていたペー

ジにそれを挟んでポンと閉じた。同時にフッと本が消えた。手品みたいに。

「野原しんのすけ――。それに――」

相変わらずの無表情で口だけを動かしていたと思ったら、視線をほんの少しだけひろしとみさえに移した。本当にほんの少しだけで、すぐに視線はしんのすけとキュゥべえへと移した。

「約束通り、ちゃんとキュゥべえを連れてきてくれたのね」

すると音も無く、ほむらは前のめりに倒れるような動作をとったと思うと、次の瞬間にはしんのすけの肩からキュゥべえが消えており、ほむらの右手に首を掴まれてぶらぶらとぶらさがっていた。

「あ、キュウリ君！」

「この間も言ったでしょう、アナタたちが約束を破らなければ解放してあげる」

「みんな、僕は平気だ。まだ動かなくていいよ」

しんのすけの声にまどかとさやかが動きだそうとしたが、キュウべえのテレパシー（当然、ほむらには聞こえていない）ですぐに押し留まった。

再びほむらは視線をひろしとみさえに移して、

「どうぞ座ってください。こうやって立ち話をしているのもなんでしょう」

「……」

ほむらはひろしとみさえに対して丁寧な言葉遣いに変えて、自分が

座っていたベンチを指差した。しかし、すぐに逃げれるようにとひろしとみさえは「いえ、結構です」と断った。
そうですか、と返事を返すと、ほむらはしんのすけへ視線だけでなく、顔も向けた。

「ほむらちゃん、教えてよ。なんでキュウリ君をいじめるの？弱い奴をいじめてなんになるの？」
「私は好きでこうやっているわけじゃないわ。私は、こいつの企みを止めるために今まで攻撃してきた。それだけよ」
言葉を言い切ったほむらの表情には、悲しみの色が浮かんでいた。

「もう……『今回』は手遅れだったけれどもね……」
「ほむらちゃん……？」

小声で呟いたつもりだったが、しんのすけには聞こえていたらしい。すぐにほむらは無表情の仮面を被りなおすと、かわりにひろしが尋ねてきた。

「じゃあ…その、ほむらさんの言うキュゥべえの企みってなんなんだよ。教えてくれ」
「……」

キュゥべえはとうとう、この家族にも橋渡しをしたのだろう。
ほむらは黙ってしまった。このことを言うべきか言わざるべきか迷っているのだ。

――あのさあ、キュゥべえがそんな嘘ついて、一体何の得があるわ

け？
――それは…。
――私達に妙な事吹き込んで仲間割れでもさせたいの？まさかあんた、ホントはあの杏子とか言う奴とグルなんじゃないでしょうね？
――ち、違うわ！

だけれど過去のことを思い出して、どうせこの家族もこのことを言っても信じないだろう。あいつと同じような言葉を投げかけて。
そもそも、もう誰にも頼らないと心の中で誓ったじゃないか。誰にわかってもらう必要もない。

「なんとか――」
「そうね、まずは魔法少女の仕組みについて説明するべきかしら」

しびれを切らしたみさえの言葉を遮って、ほむらは自分のソウルジェムとグリーフシードを手にとって野原家に見せる。

「野原しんのすけはたぶん巴マミやキュゥべえから聞いたのでしょうけど、ご両親の為に一から説明するわ」

そういって、ほむらは魔法少女の基礎知識を話し始めた。
マミやキュゥべえが言ったことはここで省略していきたいと思う。
だが、ほむらから、グリーフシードの使い方はしんのすけにとっても初耳であったので記載していく。
ソウルジェムは魔法少女が魔法を使うたびに穢れを溜め込んで、どんどん魔法が使えなくなっていくという。そしてグリーフシードはマミが言っていたように、魔法少女が魔女を倒して得られる報酬であり、　魔力の消費によるソウルジェムの穢れを吸って移し替える

ことができるアイテムなのである。　ちなみにほむらはその穢れが移るところを野原家の前に実践して見せたため、すぐに信じてくれた。

「ここまでわかりましたか？野原さん」

「ああ…だが、それとキュゥべえの企みとは一体なんの――」

「ねぇ、ほむらちゃん。じゃあそのソウルジャムに汚れがたまるとどうなっちゃうの？」

「ソウルジェムね。けれど、いい質問ね。野原しんのすけ」

いやぁそれほどでもぉ～と照れるしんのすけを尻目に、ほむらは一度ソウルジェムを見て、「ふーっ」とため息をついた。

（信じてくれないことを前提で話しているのに、なにを緊張しているのかしら）

その頃、こっそりと聞き耳を立てていたまどか達はそれぞれキュゥべえの企みとはどういうことかと考えていた。

（キュゥべえの企み……？ううん、やっぱり分からないよ…。ほむらちゃんは一体なにを知ってるの？）

（あいつ……野原さんたちに妙な事吹き込んでキュゥべえ連れてとんずらする気なのか？）

（暁美さん――）

「それじゃあ、穢れを溜まるとどうなるのか、アナタが説明してあげたらどうかしら」

「！」

すっとほむらは野原家に見せしめるようにキュゥべえの首根っこを

掴んで持ち上げた。

「キュゥべえ、あなたは『訊かれなかったから』魔法少女は実際の姿がどういうものなのか省略したのでしょう？じゃあここで全部話してもらえないかしら？ソウルジェムが穢れを溜めきるとどうなるのか。魔法少女はどういう末路を迎えるのか。そこから生まれるアナタへの利益を。全部私と野原さんに聞こえるように」

「……そんなこと、君に言った覚えはないんだけどな」

だが、キュゥべえは観念したように目をつむってやれやれとアピールすると、

「だけど訊かれたからには正直に答えないとね。そうだね、まずはソウルジェムに穢れが溜まると――」

「いた！おーいしんのすけ！！」

「？！」

キュゥべえがソウルジェムのことを説明しようとした瞬間、公園の入り口から第三者の声が聞こえて、その場にいた全員は驚いて入り口を向くと、ハァハァ…とあえぎ声を出しながら風間君以下カスカベ防衛隊のみんながこちらに血相を抱えてこっちに向かってくる。しんのすけもその場から離れてカスカベ防衛隊の元に向かった。

「や、みんなそろってパーティーに行くの？」

「そんなのんきなこと言ってる場合じゃないんだよ！！」

「どうしたの？みんな。そんなにあわてて」

ひろしとみさえも近づいて、カスカベ防衛隊に尋ねると、

「あ、おばさん！あ、あの、おばさんとおじさんってしんのすけの

ウチの隣のおばさんにひまわりちゃんを預けましたよね？」
「え？えぇ……」
風間君のあわてぶりに驚きながらみさえは頷くと、ネネがわっと泣き出してそれをボーちゃんとマサオ君が落ち着かせる。
涙声になりながらも、ネネは必死に言葉を発する。
「ひまちゃんが……エグッ……ひまちゃんが……」
「ひまが？」
まともに言葉を発せないネネちゃんの代わりに、風間君が代わりに答えた。

「ひまわりちゃんが誘拐されたんです！！！！」
風間君の言葉に、盗み聞きしているまどか達を含め、その場にいる全員の表情が瞬間冷凍するように凍りついた。

よもやこんなときに、こんなことが起きるなんて、誰も予想できなかっただろう。
カスカベ防衛に連れられて急いで野原一家たちは家に戻っていくと、隣のおばさんの家の前にパトカーや救急車、ヤジウマ達が群がっていた。
ヤジウマ達をかき分けて、警察に問いだし、そして事情を聞かされて半狂乱になるみさえ。それを慌てふためかせながら落ち着かせようとするひろし。呆然とするカスカベ防衛隊と魔法少女達。
しんのすけにとっては『あの時』よりも、魔女の結界に迷いこんだときよりもずっとずっと非現実的な出来事に出くわしていた。

ひまわりが、連れ去られた。

警察によれば、しんのすけ達がほむらと話している間に、おばさんの家に窓ガラスを割って、誘拐犯が侵入してき、何か棒のようなものでおばさんの頭を殴って気絶させた後、ひまわりを連れ去り、その騒ぎに気付いた近所の人が連絡したという。
おばさんは頭部にタンコブが出来るくらいの軽症で済んだが、救急車に運ばれる前に何度も何度も野原一家に謝ってきた。
一旦みさえを落ち着かせるためにも、野原一家は自分の家に戻っていった。
カスカベ防衛隊も魔法少女達も気を遣って、それぞれ家に帰ることにした。
別れ際にまどかが代表するようにひろしの前に立って

「あの……野原さん。私たちに出来ることがあったらなんでも言っ

て下さい。力になります」
「…ああ、ありがとう」
「……」
一方、一緒についてきたほむらは終始沈黙を保ったまま、キュゥべえをにらみつけていた。場所が場所なだけにあまり下手に騒ぎたくないのだろう。キュゥべえに今すぐにでも問い詰めたいことが顔に出ていた。
そういえば、彼女達が去った後、ずっとしんのすけの肩に乗っていたキュゥべえがいない。彼女達と一緒に帰ってしまったのだろうか。

――その頃、春日部の人目につかない場所にポツンと立っている廃墟と化した教会内にて。

「ご苦労様、今更だけど君がここに来たのはちょっと意外だったよ」
木製の長椅子に座っているキュゥべえは、となりに座って、ひまわりを抱きかかえている少女に言った。
「それにこんな面倒な仕事まで引き受けてくれるなんてね。珍しいじゃないか」
「うるせーな、あかんぼが起きちまうだろが」
別に君にテレパシーしているんだから起きる心配は無いんだけどな、

と思いながらちらりとすやすやと寝息を立てて寝ているひまわりを見やった。

「ついでにしばらくその子の世話までしてくれるとありがたいんだけどな」

「はぁ？！！」

さすがの少女も面食らったようで、目を見開いて大きな声を出してしまった。

うっかりひまわりを起こしてしまったのか一瞬ひまわりを見下ろすが、相変わら寝ている。

「ざけんじゃねぇよ、なんでアタシが――」

「じゃあ、行き場の無いその子はここに捨てればいい。君の意志に任せるよ。だけど忘れないでくれ、この子をひどい目に合わせた家族を救ったのも君の意思だったってことを」

「――ッ」

キュゥべえに痛いところを突かれて、少女は反撃の手札を失って黙ってしまった。すると、ゆっくりとひまわりの目が開かた。

「あっ…あう～あ～」

「ああ、起きちまったのか…。おーよしよし…」

「あ～う～」

ひまわりは少女に向かって両手を伸ばしていた。その穢れを知らない無垢な瞳に、少女は一瞬釘付けになる。

そして諦めたように大きなため息をつくと、

「……わーったよ、アタシが世話すりゃいいんだろ世話すりゃ」

「引き取り手がみつかるまではね。それまでの間、僕がその子を世話をするための道具を調達してくるからそこらへんに関しては安心してくれ。ああ、分かってると思うけど、その子をあまり外には出さないほうがいい」
「はいはい」

ならいいよ、とキュゥべえがイスから立って教会から立ち去ろうとする直前、何かを思い出したように足を止めた。

「あ、そうだ。君にはまだ伝えてなかったけれど僕はこの街で新たに2人、魔法少女と契約したんだ」
「何ソレ？超ムカつくじゃん」

ジロリと少女の赤い目がキュゥべえを睨む。

「やれやれだぜ、こんな絶好の縄張り、みすみすルーキーのヒヨッ子にくれてやるってのも癪なんだよねぇ。マミはともかくとして」
「どうするつもりだい？」
「決まってんじゃん」

ニヤリと少女は不敵に笑う。

「要するに、ぶっ潰しちゃえばいいんでしょ？……ソイツら」
「たいや？」

【つづく】

4．それは、とってもうれしいゾって（後書き）

【次回予告】
誘拐犯からひまわりを取り戻すため、野原一家と魔法少女達は協力して誘拐犯を追うことになった。
しかし、探索途中で新たなる赤い魔法少女が現れる、彼らの前に立ち塞がる。
同時に、彼らに今までにない、『嵐』が訪れようとしていた――。

小説　クレヨンしんちゃん　嵐を呼ぶ六人の魔法少女たち　ふぁいぶ　お楽しみに！！
お知らせ：次回の第五話は、３つの視点から送るオムニバス形式になります。なのでまた少し遅くなります。（目標としては今年中にはうＰするように努力します）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6076y/

小説 クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ六人の魔法少女

2011年12月17日19時56分発行